
夢の彼方の魔法陣

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の彼方の魔法陣

【Nコード】

N9599X

【作者名】

元素猫

【あらすじ】

魔導士養成所の三年生イーリーは、卒業試験に『ドラゴン狩りの手伝い』を依頼されてしまう。途方にくれた彼は、とりあえずレポートを書くために最強の闇の魔導師アイソリユースが残した蔵書を見せてもらえることになり……。

プロローグ

名前を呼ばれ振り向いた瞬間、彼の幅広剣が深く突き刺さった。

彼女は、何が起きたのかわからず、彼の顔を見つめる。穏やかで優しいその顔には、微塵の迷いもない。

噂は本当だったのだと、その時彼女は気付いた。到底、相容れることなど出来ない存在だったのだとわかっていたが、終わりはあまりに突然で、あつけない。

自分は何だったのだろうか。何のために、戦ったのだろうか。すべてが、無意味に思えた。

涙が溢れたが、それが彼の心を動かすことはない。彼には野望がある。その野望を成就させるためなら、何であつても払いのけるだろう。そう、自分も払いのけられたのだと、彼女は思った。

「人心を惑わす不逞の輩よ。この地に眠るがいい」

「あなたは私の屍骸の上に、何を築くというの」

「法を築く。それが、この国の礎となる」

「血塗られた法に、人の心は縛られない」

「光が強く輝けば、闇はそれに打ち消され薄くなる。やがて、時がすべてを忘れさせるだろう」

彼は、突き刺した剣を真上に斬り上げた。彼女の肉体は、無残に裂かれ、闇の空を血に染めた。

「魔女は死んだ！ 我らは勝利したのだ！」

勝ちどきの声をあげる。

彼は彼女の屍を一瞥し、歩き出した。彼にはまだ、最後の仕事が残っているのだ。

プロローグ（後書き）

10年ほど前に、自分が初めてちゃんと書いたファンタジーです。
すでに完結した作品なので、多少の見直しをしつつ更新したいと思います。

第一章 一話

すべての光が失われたような暗闇の中で、イーリー・シュレイガーはひとり思考を巡らせていた。理論は完璧である。手順さえ間違えなければ、失敗することはない。そう自分に言い聞かせて、彼は時が来るのを待った。

ほんのわずかな時間なのだろうが、彼にはとても長く感じられた。まるで死に直面したかのように、これまでの人生が走馬灯のように蘇る。

病に倒れ、道端で手の施しようもなく息を引き取った母の姿が、深い悲しみとともに無力な自分の心を締め付けた。あの時、強い人間になろうと誓ったのだ。

この難関を突破しなければ、あの時の誓いも、これまでの努力も無駄になってしまう。

イーリーは、頭を振って弱気な自分を追い払った。

……胸を張りなさい。

恥じるようにうつむく彼に、母がよく言い聞かせた言葉だった。

イーリーは胸を張った。戦うべき相手は、いつも自分の内にあるのだ。

緊張のためだろうか。気が付くと、わずかに魔導書を持った右手が汗ばんでいた。イーリーは魔導書を左手に持ち替えると、着ていたローブで汗を拭い、冷えた空気を鼻から吸い込んだ。そしてゆっくりと口から吐き出し、それを数回繰り返して、気持ちを落ち着かせた。

やがて一つの、炎のような明かりが灯る。明かりはイーリーを中心とした正方形を描くように、ぜんぶで四つ灯って暗闇を照らした。ぼんやりとした光の中に浮かび上がった彼の姿は、十四、五歳の、まだあどけなさを残す少年であった。

黒髪は闇に溶け、わずかに茶色味を帯びた瞳には、橙色の明かり

が揺れている。

ハイデル王国が魔導士協会と協力して設立した、養成所の三年生生徒というのが彼の立場であった。

ハイデル王国は、建国の英雄である初代国王ゼーマン・ハイデルが、勇敢な騎士であると同時に、強力な魔導士であったところから、騎士だけではなく魔導士の育成にも力を注いでいた。

この養成所を卒業した者だけが魔導士を名乗れるため、世界中から多くの若者が入学して来ているのだ。イーリーも、その一人だった。

「それではこれより、魔法課程の修了試験を開始する。生徒イーリー・シュレイガー君、始めなさい」

「はい」

直接、頭の中に語りかけるような声に応え、イーリーは魔導書を右手の掌に乗せ、挟むように左手を添えた。

この試験では、課題となる四元素——地、水、火、風——の魔法のうちから、最も得意なものをひとつ披露しなければならない。その際、補助として魔力を増幅する道具をひとつだけ持ち込むことが許されていたのだ。多くの呪文で紙面を埋めた魔導書は、それ自体が魔力をわずかながら帯びていた。

「定義！
ヴァース」

イーリーの声に呼応して、魔導書に添えた左手が燐光のような光を放った。

魔法の基本は、代価による契約である。

元素界の住人と契約し、魔力を報酬として払う代わりに、その力を借りるという契約の流れを儀式化したのが魔法なのだ。多くの魔力を消費するほど、強力な住人の力を借りられるのであった。

儀式はまず、住人がこの世界で力を揮^{ふる}えるようにするため、仮の体を用意しなければならない。この仮の体を『素態^{そたい}』と呼び、魔力を練成して造る。練成した魔力は、そのままではすぐに散ってしまうので、一度媒介に留め置くことが必要だった。イーリーの場合は、

光る左手が媒介になっていた。

媒介に自分の体の一部を使うのはごく一般的であり、初歩的なものであった。素態を別の物質に伝達させる必要がなく、力を利用する時の感覚が掴みやすいのである。

魔法の扱いは、体系化された理論と経験による感覚が必要なのだった。

「クリート召喚！」

媒介の左手が熱を帯びたように赤くなり、蛍の光のような速さで明滅を繰り返し始めた。元素界との間に道が開かれ、用意した素態に見合う住人が移動を始めているのだ。

これがもっと熟練した魔導士ならば、経験とより高度な理論を用いることで、一連の作業を簡略化し、時間の短縮を図ることが出来る。そして、時には一瞬で力行使するのだ。

やがてイーリーの左手が炎に包まれた。どうやら、火の住人を呼び出したようである。

素態に入った元素界の住人は、その能力に応じてこちらの世界で最も適した姿になるのだ。そして、

「闇を切り裂け、炎よ！」

イーリーはそう叫んで、炎に包まれた左手を突き出した。炎は渦巻き、闇の中を跳ね回って彼の頭の上に着地した。その姿は、とても可愛らしい、

「にゃあ！」

猫だった。

試験を終えたイーリーは、紺のブレザーにズボンという養成所の制服に着替え更衣室を出た。すると、

「やあ、試験はどうだったかな？」

満面の笑みで近付いて来たのは、入学してからずっと学年トップの成績を維持し続けている、レンツ・ファラディであった。

イーリーは彼を睨み付け、何も言わずに歩き出す。

試験の様子は黒水晶によって映し出され、誰でも見る事が出来るのだ。案の定、レンツはこんなことを言い出した。

「僕が小さい頃、お父様が『砂漠の貴婦人』と呼ばれるスフィルティアを、誕生日に贈ってくれたことがあるんだ。僕に懐いていたんだけど、魔導士になるため王都へやって来てから、ほとんど会うことが出来ないんだ。代わりと言う言葉は悪いが、ぜひ君に願っていたと思うているんだよ。君の不思議な能力で、僕の寂しい心を癒してくれないだろうか？ ああ、ちなみにスフィルティアというのは猫の種類のことでね……」

きつと、試験に合格していなければ、イーリーは彼を殴っていただろう。

試験の可否は、扱う魔力の大きさによって決まるのだ。もしあの時、現れたのがネズミであつたら不合格だつた。しかし、魔導書を使ってあのレベルでは、合格といっても笑われて仕方がない。

自分でそのことがわかつているだけに、レンツに言い返すことが出来なかつた。

入学してからずっと、イーリーは下から数えた方が早いぐらいの成績である。そんな彼に常に上位のレンツが突っかかってくるのは、ある理由があつた。

魔導士は魔法の他に、調査も行う。強力な魔力を持った者は各国に召し抱えられるが、それ以外の者は魔導士協会に寄せられた依頼を受けたり、魔具という魔法補助の道具や薬——病気の治療に使うものはもちろん、毒や実験の材料——を作つて販売するなどして生計を立てるのだった。

イーリーは、母が病に倒れたときに魔導士になることを決意した。その時から彼の目指すものは、国に仕えることではなく、在野で病と闘うことであつたのだ。そのため調査の授業は、彼にとつてもっとも重要視すべきことだったのである。

もともと、記憶力は抜群に良い。魔法も筆記テストでは上位にラ

ンクインするが、才能に左右される実技がどうしても苦手であった。結果、総合では平凡な成績になってしまったのである。

レンツはそんなイーリーに、唯一、調合では勝てなかった。調合の筆記も実技も、イーリーは完璧だったのだ。それが、レンツのプライドを傷つけたのである。仮にイーリーが魔法も優秀であったなら、レンツもそれほどこだわることはなかったのかも知れない。

そんな理由から、レンツはイーリーの顔を見れば、何かひとつ皮肉を口にした。もしストレスが魔力に変換できたなら、イーリーはハイデル王国宮廷大魔導師のチャンドラーに匹敵する魔導士になっていたことだろう。

第一章 二話

機嫌よく口を滑らかに語るレンツに後をつけられながら、イーリ―は受付に向かっていた。

魔法課程の試験は合格したが、それは単に卒業試験を受ける資格を得たに過ぎない。これを合格しなければ卒業は出来ず、魔導士にもなれないのである。

この養成所には留年はなく、卒業できなければ退学なのだ。もう一度魔導士を目指す場合は、再び一年から勉強をしなければならぬ。厳しいようだが、わずかな入学金を支払えばその後は一切費用が掛からないばかりか、毎月わずかではあるが小遣いまでもらえるシステムなので、能力がないと判断された生徒を残しておく余裕はなかった。それでも広く門戸を開けているのは、貧富の差が魔導士としての資質に関わりがないためであり、同時に、それだけの需要があるということでもあった。

受付に到着したイーリ―は、数人の列に並んで順番を待った。その間も、すぐ後ろでレンツが顔に掛かる金髪を払い除けながら、饒舌^{うぜつ}になつていた。大半がフラディ家の自慢であり、すでに何度も聞かされた話ばかりである。

レンツがこうしてイーリ―に自慢話をするのは、周囲の生徒たちにとつても見慣れた光景だったようで、気にする者はない。仮に気になったとしても、あれこれ口を挟むことはないだろう。誰も、自分がイーリ―に立場になることを望んではない。

やがてイーリ―に順番が回り、窓口に受験票を差し出した。卒業試験の課題は、例年通りレポートの提出とEランクの仕事をこなすことだった。

Eランクは、魔導士協会の依頼の中でもっとも簡単とされ、報酬もごくわずかなものである。

「えっと、じゃあこの封筒からひとつ選んでください。中に依頼内

容が書かれています。同封の依頼完了証明書にサインをもらって、レポートと一緒に提出していただきます。期間は本日より一ヶ月間です。ちょうど、シユタルク王の即位十周年記念式典の翌日までとなるので、忘れないようにお願いします。何か質問は？」

「いいえ、ありません」

「じゃあ、がんばってください」

封筒を受け取ってその場を去ろうとした時、イーリーは受付の人に呼び止められた。

「君はイーリー君だよな？」

「はい、そうです」

「言い忘れましたが、君はこの試験で不合格だった場合、退学となります」

「はい」

「それで、その後の再入学も許可されませんので、そのつもりでいてください」

「えっ？ それってどういう……」

「つまりだね、君は二度と魔導士にはなれないということだよ」

嬉しそうに、横からレンツが口を挟んだ。

「君のあの成績では、仕方がないところだろうね。唯一、人並みな調合の知識を生かして、医者にもなったらどうだい？ ああ、でも医者になるにはお金がかかる。君には無理か」

なおも喋り続けるレンツの横で、受付の人が言った。

「魔導士に求められるのは総合的な能力です。特に求められるのは、やはり魔法の力なわけです。魔法の力は努力だけではどうすることも出来ないことを、十分に理解されていると思います」

うなだれるしかなかった。つまり、これ以上は見込みがないということなのだ。

イーリーはくちびるを噛んだ。悔しかったが、まだダメだと決まったわけではない。今回の試験に合格すれば良いのだ。

受付ホールの端に移動した彼は、恐る恐る封筒を開けた。レポー

トなら自信がある。簡単な依頼であるようにお願い、内容を確認した。

「ドラゴン狩りの手伝い……」

イーリーは言葉を失った。

世界で最も巨大で凶暴と言われるドラゴンに挑み、どれほどの戦士が命を落としたことだろう。たとえ手伝いとはいえ、とてもエランクの仕事とは思えない。

……ボクをどうしても退学にさせたいのだろうか？

一瞬、イーリーはそう思ったがすぐに打ち消した。封筒は自分で選んだのだ。きっと何かの手違いがあつたのかも知れない。

彼は封筒を持って、受付に戻ろうとした。するとそこへ、レンツが寄って来たのである。

「崖っぷちの君は、どんな依頼を受けたのかな？　ちなみに僕は、空き家に住み着いた怪しい一団の調査、というつまらない仕事だったけれどね」

「ボクのは手違いみたいだ」

「ん？」

レンツは首を傾げ、イーリーの封筒を奪うと依頼書を読んだ。

「何するんだ！」

「……ドラゴン？」

「そうだよ。これはエランクの仕事じゃない。だから交換してもらうんだ。さあ、返してくれ」

レンツはしばらく考え、奪い取った封筒をイーリーに返した。

「これは、君にとって千載一遇のチャンスと言えるだろうね」

「えっ？」

「いいかい、魔導士になれたとしても、君の腕では雇う国はないだろう。だとすれば、個人で依頼をこなすか、どこかに就職するかあるまい。だが、いずれにせよ、今の成績ではどれも難しいと言わざるを得ない」

「……………」

「だからといって、新しく自分の店を開く資金もないだろう。つまり、せつかく魔導士になれたとしても、その能力を生かすことは出来ないということさ」

「そんなことわからないだろ」

「いいや、わかるさ。毎年、数百人もの卒業生がいるんだ。いくら需要があるとはいえ、誰でもいいというわけじゃない。事実、過去の卒業生の中で魔導士以外の仕事を見つけた者は半数近い。つまり、優秀な人材だけが、その後の成功を約束されているというわけだよ。今の君は、絶望的だろうな」

イーリーは、顔をしかめた。彼にも心当たりがあつたのだ。

魔導士になるべく村を出て行った若者が、卒業して実家に戻り、農業を継いだことがあつた。せつかく魔導士になれたのにと幼い彼は思ったが、今考えればレンツの言う通りなのかも知れなかった。

「しかし、だからこそこの依頼は、チャンスなんだ」

「どうということだよ？」

「学校の成績よりも、実績を重視する人間もいるということさ。手伝いとはいえ、ドラゴン退治に参加することは、君のお粗末な成績を打ち消すだけの甘い響きがある」

レンツはニツと笑って、イーリーの耳元で囁いた。

「手伝いと言っても、後方支援かもしれない。それに、実際に行ってみてあまりに危険な依頼なら、断つたとしても問題にはならないさ」

その言葉に、イーリーの心は揺れた。

薬を作つて病人を救うとしても、やはりどこかに就職しなければならぬだろう。路頭で配つた薬を飲む奇特な者はいまい。

三年間努力をしたのは、肩書きが欲しいからではなかった。

イーリーは封筒を胸に抱え、小さくうなずいた。とりあえず行つて、依頼主から話だけでも聞いてみよう、彼はそう考えた。

「お互い、かんばろうじゃないか」

レンツはそう言い、イーリーの肩を軽く叩くと、颯爽と去って行

った。そのうしろ姿を、複雑な気持ちで見送ったイーリーは、風に消えるほど小さな声で呟いた。

「感謝、すべきなのかな……」

けれど、それでレンツに対する気持ちが軟化したわけではない。素直に喜べない、それが感想だった。

第一章 三話

養成所を出たイーリーは、寮には戻らず公園に向かっていた。あまり人がいない場所で、ゆつくりと考えたかったからだ。

王都にある公園は、作られた時の予想に反して、あまり国民の憩いの場とはならなかった。その理由はただひとつ、作られた場所にある。

ハイデル王国の王都は、巨大な湖と岩壁に挟まれた場所に、東西南北に沿って造られていた。まず、北側にある湖を背にして王城が建ち、そこから真つ直ぐ南に、街を貫くように大通りが延びている。突き当たりには岩壁がそびえ、その麓に植林して公園を作ったのだ。

また、西側には王都への入口になる正門があり、それ以外は高い壁によって囲まれている。正門から真つ直ぐ東へ続く道の先は、歴代の王の名が刻まれた石碑があり、国内外から観光に訪れる者も多い。どちらかといえば、この場所の方が憩いの場として利用されるようだ。

ところで、公園の場所の何が問題なのか。それは、ハイデル王国に伝わる建国の伝説にまつわる噂にあった。

今より二千年以上も昔、まだ世界は暗く閉ざされ、闇の眷属によって支配されていた。多くの人々が無法の世を嘆き、苦しみと悲しみの声を上げる中、世界中で勇者が立ち上がっていた。この地に現れたのはゼーマンで、人々の先頭に立ち勇猛果敢に戦ったのだという。

ゼーマンはもともと、闇の魔導師で最強と言われた『魔女アイソリユース』を追いかけて旅をしていた。そしてこの地でようやく倒すことができ、転生して蘇ることがないようにと、魂を封印したのだという。その封印の地こそが、公園の真下だったというのだ。

根拠は、ゼーマンの死後に発見された、一冊の本にあった。

『対比力学』と題されたこの本の著者が、ゼーマン本人だったの

である。ただし、発見された時はただ紐で閉じられた原稿だったのを、後に製本して仕上げた際に、一行目に書かれた文字をタイトルにしたのだ。

この本によると、闇の力を抑えるために、無理に光で押し進めることは逆効果であると書かれている。つまり、強引な封印はいずれ破綻することを意味していた。これを回避する方法として、二つの力を対極に置き、バランスを図ることを提唱していたのだ。

これに当てはめて王都の位置関係を見ると、光の象徴である王家と均衡するのは、西の正門か南の公園ということになる。封印の地を正門とするのは考え難く、また、現在の王こそが国を支える光であると考えれば、必然と公園が浮かび上がるのだ。

公園に近付くにつれ、人の姿はまばらになった。中に入ると街の音も遠く、誰もいない小道が木々を避けるように曲がりくねりながら、奥へと続いていた。

ほとんど手入れはされておらず、空を覆う枝葉は広がり放題で、見上げて空はほとんど見えない。それでも、意図的に間隔をあけた場所には隙間ができ、そこから日光が差し込んで、大地に突き刺さるように白くすじを作っていた。

薄暗くはなかったが、曇りガラス越しに眺めたような、ぼんやりとした光景だ。

イーリーは散策するようにしばらく歩き、途中のベンチに腰を降ろした。ベンチの上は落ち葉が積もり、払っても砂っぽく、やや湿った感じがする。

座るなり依頼書を取り出して内容を確認するが、何度見てもその文字が変わるわけではない。

「はあ……」

溜息をつき、イーリーは考えた。

依頼書に書かれている従事期間は七日間、依頼主のいる場所まで

馬車で一日ほどだろうか。

毎月もらえるわずかな小遣いを貯金しており、それを使えば往復馬車に乗れるだろう。だが、そのお金は卒業後の生活費のために貯金しているのである。使うとしても、それは今月分の小遣いだけだ。それなら、片道だけでも馬車を利用出来た。

「行きは歩きだな。それにおそらく、向こうに行ったらレポートを書く時間なんてないだろうから、先に済ませておくか」

問題はどんな内容で、どこでレポートを書くかだった。学校の図書室が一般的だろうが、出来ればレンツには会いたくなかった。きっと、用がなくとも顔を出すだろう。

イーリーは、持っていた依頼書を封筒の上に乗せ、両手を挙げて大きく伸びをした。気持ちよく、目を閉じたその時、突然強い風が吹き抜けた。

小さく声を上げたイーリーは、慌ててベンチを立つと手を伸ばす。しかし、指の隙間をすり抜けた依頼書は、ふわりと波打ちながら、滑るように地面に落ちた。

駆け寄って拾おうとした彼は、視界の端に人影を見つけた。覆面で顔を隠した、黒づくめの怪しい人物だ。はつきりとはわからなかったが、体のラインや肉付きから、おそらく男性だろうと推測出来た。

イーリーはとっさに身を屈め木の陰に隠れると、そっと様子を伺った。黒づくめの男は、何かを探するように視線をあちこちに向けている。

だが、どうやらこの近辺には目的のものはなかったらしく、男は公園の奥へと進んで行った。イーリーは一瞬迷ったが、封筒を上着の中に仕舞い、後を付けてみることにした。

危険な雰囲気を感じたが、強く興味を惹かれたのだ。以前、『東方国家の歴史と文化』という本で、似たような姿をした隠密部隊を見たことがあったためである。

……何を探しているんだ？

このまま奥に進んでも、あるのは行く手を遮る岩壁だけだ。実際に行ったことはなかったが、地図には特に何も書かれていなかったのを覚えている。

もっと近くで……そう思っただけ移動しようとした時、落ち葉を踏みつける音が背後で鳴った。イーリーは驚いて振り向いたが、何も無い。しかしそのせいで、イーリーは男に気付かれてしまったのだ。舌打ちをした男は、懐からやじりのようなナイフを取り出すと、一直線に走ってきた。その足は速く、息を呑む間に距離は半分に縮まっていた。

イーリーは背を向けて逃げ出す。後悔したがすでに遅い。慌てていたのも、自分がどこに向かっているのかもわからなかった。

ただ、出口へ、街の賑やかな方へ、そう思いながら走っていた。しかし、目前に現れたのは、木々よりも遥かに高い岩壁だったのである。

……どうしよう。

触っても、叩いても岩壁は消えない。男の姿は、すぐそこまで迫っている。

相手の実力は不明だが、少なくとも自分では勝てないだろうとイーリーは確信していた。あまりに情けないが、それを前提として考えなければならぬ。

イーリーはとにかく、今の状況を冷静に分析した。

この公園に訪れるものはほとんどなく、助けは当てに出来ない。だが逆に公園を抜けさえすれば、男も追っては来ないだろう。自分がすべきことは、とにかく逃げることだ。

頼れるのは、心もとなない魔法のみである。男が養成所の制服を知っていれば、イーリーの姿を見て、多少は魔法が使えることを警戒するはずだ。成績まではわからないから、多少のハツタリとしては使える。

……今の位置関係を変えないと。

公園を出るなら、今の位置ではまずい。イーリーは、岩壁に沿っ

て走り出した。

最初は全力で走り、男が横に並んだらスピードをわずかに落とす。すると、男が自分よりも前に出て行く手を遮ろうとするはずだ。そうすれば、互いの位置関係が九十度回転したことになる。

イーリーはそう考えたが、男は悠長に追いかけてくをするつもりはないようだった。

第一章 四話

イーリーがどう動こうとも、男の目指す標的が変わるわけではない。最小の動きで距離を縮め、手の中に隠すように持った小型ナイフで切りつけてくる。木を盾にしながらかろうじて避けているが、それも徐々に限界がきていた。まず、彼の体力がもたない。普通に逃げるよりも、心身ともに疲労していた。

腐葉土に足を滑らせたり、木の根につまづくことも多くなる。そうした隙を、男は決して逃さず責めてくるのだ。最初は制服を切るだけの攻撃も、やがて皮膚に浅いながらも傷を残すようになった。血はほとんど出なかったが、逆にそれが痺れるような痛みとなってイーリーを襲う。

なんとか形勢逆転を狙おうと魔法を使うチャンスを探すが、その隙が相手にはない。今のイーリーの能力では、どれほど急いでも三十秒は必要だった。『素態』の練成には、意識の集中も必要である。逃げつつ、攻撃も避けなければならぬ今の状況では、魔法を使うのは無理といえた。

……どこかに隠れられれば。

魔法でもたいした攻撃にはならない。だが、このまま逃げ回っているよりは、何かのきっかけになり得る可能性がある。時間を稼げる場所を、イーリーは視線を素早く走らせて探した。

祈るような気持ちだった。すると、それが通じたわけではないだろうが、岩壁に、錆付いて同化している鉄の扉を発見したのである。さらにその隣には、人工的に掘られたと思われる横穴が開いていたのだ。

鉄の扉は簡単に開きそうにない。だが、横穴もどこまで続いているのかわからない。どうすべきか、イーリーは迷った。その時である。

横穴から、十歳ほどの少女が飛び出して来たのだ。少女はイーリ

「たちの姿に、驚いたようにその場で立ちすくんでしまった。それを見た男が舌打ちをし、イーリーは微かなその音を捉えて直感する。『逃げるんだ!』」

叫ぶと同時に、イーリーはあらん限りの力で大地を蹴った。前のめりになりながら少女を庇うように腕を回し、勢いのまま倒れて地面を滑る。

痛みに低くうめいたイーリーは、自分を見下ろす影に気付いた。

男が、とどめを刺しにきたのだろうか……そう思い向けた視線の先には、先端が三又に分かれた槍を持ち、帷子かたびらの上から胴と両手足に鎧をまとった老騎士の姿があった。

「プリム、大丈夫か？」

どうやら、少女の知り合いのようだ。

老騎士は瞬時に視線をめぐらせ、状況を把握する。プリムという少女に覆いかぶさるように、一緒に倒れているイーリーの右の肩口には小さなナイフが突き刺さっていた。そのナイフを投げたのは、黒い覆面で顔を隠した男だ。よほど見当違いでもない限り、プリムにとって誰が敵かは明白である。

「お前は、この国の者ではないな」

一步を踏み出して少女とイーリーを背に、老騎士は槍を構えた。幾多の戦いを潜り抜けてきた猛者の気迫、それが老騎士の全身から立ち昇る。

男はわずかに怯み、老騎士はその隙を逃さず大地を蹴る。年齢や鎧の重さなど感じさせぬ身のこなしで、自分の間合いに敵を捉えて鋭く槍を突き出した。男が上半身をひねってかわすと、老騎士はすぐさま腕をねじり手前に引きながら横に薙なぎ払った。

槍の三又の両側は下向きに鋭く伸び、外側も内側も鋭利な刃になっている。そのため、前後左右どの動きでも敵を討つことが出来た。

男の脇の下辺りを浅く裂いた老騎士の槍は、間髪いれず次の攻撃に転じる。しかし男も、いつまでも黙って受身でいるわけではない。何本ものナイフを投げ、老騎士の接近を牽制する。打ち合いこそ無

かったが、互いに間合いを計りつつ、見えないやり取りを繰り返して広げるその様子に、イーリーは圧倒されていた。

自分の下で少女が体を動かそうとしたことで我に返り、イーリーはすぐに起き上がって手を差し出す。

「大丈夫？」

彼が尋ねると、少女は少し警戒した様子で黙って頷く。言葉を交わすこともなく、二人は自然と老騎士の闘いに視線を向けていた。その時、イーリーは少女を守らなければという責任感が生まれ、わずかに前に出て少女を庇うような位置に立った。そして、誰にも気付かれないように意識の集中を始める。『素態』を練成し、いつでも魔法を使えるように準備しておこうと考えたのだ。

イーリーは男に見えぬように媒介となる左手を背後に隠し、『素態』を定着させた。左手が燐光を放ち、少女が息を呑むのがわかった。

善戦している老騎士の邪魔にはなりたくない。イーリーはタイミングを待った。

男も老騎士も、イーリーの行動には気付くことはなく、互いに目の前の敵を倒すことに集中している。どちらも一歩も引かず、静かな攻防を繰り返していた。だが、どれほど鍛えようとも持久力は無限ではない。同じレベルまで昇りつめた相手なら、最終的には年齢がわずかな差を生んでしまう。それは、老騎士の荒い呼吸によって現れた。

これまで乱れのなかった呼吸が荒くなり、彫りの深い顔に汗が滲む。表情にも、焦りが浮かんでいた。

イーリーは息を潜め、出来る限り気配を消す。おそらく今の男の頭には、彼という存在は失せているか希薄だ。それはイーリーが男にとって手に余る相手ではないからだ。それを逆手に取ろうと考えたのである。チャンスは一回、それを逃せば真っ先に殺される可能性があった。

もし男が自分と少女を同時に攻撃したなら、老騎士が守るのは少

女だろう。イーリーにも、男にもそれは確かなことだった。

「あつ！」

わずかに意識が別のことに向いていたその時、少女が小さく声を上げた。老騎士の動きが鈍ったのを見逃さず、距離を縮めて槍の内側に男が入り込んだのだ。

少女が思わず飛び出そうとするのを押しとどめ、イーリーは素早く左手をかざした。

「召喚！^{クリート}」

突き出す手刀から炎が噴出し、紅色の残像を引きずりながら宙を走った。拳ほどの炎は男の眼前に迫り、見事に命中……したかに思えた。炎は霧散し、立ち上る黒い煙が晴れると、呪文の刻まれた短刀をかざす男の笑みがイーリーの視界に飛び込む。

魔法は失敗だった。誰もが、そう思った。だが直後、消えたはずの炎が再び現れたのである。男の背後に小さな火の玉がひとつ、またひとつと浮かんできた。男も驚いたが、一番驚愕したのはイーリーである。彼は何もしていない。

その間にも火の玉は次々に浮かび、やがてひとつに集まると大きく旋回し、巨大な龍の姿に変貌して男を襲った。さすがの男の持つ短刀も役には立たず、男は老騎士から離れて地面に転がった。そして、明らかに分が悪いと悟ったのだろう。戦うのを諦め、イーリーを一瞥^{いちべつ}すると木の葉を舞い上げて消え去ったのである。

すると炎の龍も標的を失って、岩壁に激突して消えた。その一瞬、イーリーは小さな笑い声を聞いた気がしたのである。空耳かと思っただ、その声はいつまでも耳に残っており、思い出すほどに鮮明になっていったのである。

「なんだっ たんだろう」

呟きながら、彼の脳裡にはひとつの名前が浮かんでいた。慌てて頭を振り、イーリーは近付いてきた老騎士に深く頭を下げ礼を述べる。そうしながら卒業試験のことを思い出し、気持ちを重くしていた。

第二章 一話

退屈な毎日だった。有り余るほどの時間は無為に流れ、ドス黒い想いはやがて、塵ほどの価値も見出せぬほどか細いものにならなっていく。愛と憎しみは表裏にあつて、どちらかが失せればもう片方も意味を失う。それでもこだわるのは、ただ、意地だけだったのだらうか。

……ちがう。

自分を繋ぎ止める、ただの細い糸だ。正気を失わずにいるための、頼りない支えでしかない。深い闇は寂しく、孤独は切ない。涙も枯れ、想いも失せたとき、残されたのはただの言い訳と未練のみ。

彼女にはわかっていて。それでも、どこかに引つかかっているに過ぎない。喉の小骨の不快感のような、思い通りにならない歯がゆさばかりが身を焦がした。

時々外を眺めるが、代わり映えない風景が季節の移り変わりと共に漂っているだけだ。誰かが訪れては、恐れるように去っていく人が住み着くようになったのは、つい最近だ。それでも、楽しい相手ではなかった。

老人に、同種族の母と娘である。毎日は変わらず、退屈だった。だから新しい『おもちゃ』を見つけたとき、少しだけからかってみた。不思議なことに、驚きはしたようだが逃げ出さなかった。それどころか、荷物を抱えて再びやって来たのである。彼女にとってその行動は、とても新鮮だったのだ。

夜、そつと夢の中に侵入してみた。夢は、その人の柔らかい心を刺激する。最初は単純な好奇心だけで、罪悪感はいつも最後に訪れるのだ。だから彼女は夢から覚めたとき、とても後悔した。

目が覚めたとき、涙で滲んだ視界には赤銅色の天井があった。手

の甲で涙を拭いながら上半身を起こしたイーリー・シュレイガーは、見覚えのない場所にしばらく思考を巡らせた。幸い、この場所に関する記憶はすぐに見つかる。まだ昨日という新しい記憶は、彼の脳内で再生された。

ボルン・ディラックと名乗った老騎士は、イーリーが養成所の生徒であることを知ると、岩壁の鉄扉を示して言った。

「あそこにはアイソリユースの蔵書が保管されている。一部の写しは図書館にもあるが、その原本やここにしかない珍しい本があるそうだ。俺たちには関わりのないものだが、魔法を使う者には興味深いものばかりだと思う。プリムを助けてくれた礼に、中へ入る許可証を発行してあげよう」

最強の魔導師アイソリユースの蔵書があることは、多くの人を知っていた。そしておそらく封印の地として知られる公園にあることも、公然の秘密のように囁かれていた。だが、それは封じられ、誰も近づけない場所にあるのかとイーリーは思っていたのだ。

ところが入口が意外とわかりやすい場所にあり、人助けをしたからといって簡単に入れてしまう事実に驚いた。イーリーが率直に感想を言くと、ボルンは声を上げて笑った。

「俺がここの番人を任された時、大魔導師チャンドラー様より申し付かったことがある。それは、この場所が無闇に立ち入れる場所ではないが、だからといってすべての者を遠ざける場所でもないということだった。どういう意図でそう申されたのかは俺のような無学な者には理解出来ないが、俺自身の判断に委ねてくれたのだと理解することにした。つまり、俺が許可証を発行した者だけが立ち入れることにしたのだ。それに……」

ボルンは、プリムのきよとした顔に視線を向け、

「この部屋の主は今でも、アイソリユースであるということさ」

これまでも何人かが、この中に入ったことがあるらしい。しかし全員、一日もせずに帰って行ったのだという。それは番人も同じで、ボルンが任命されるまでも数十人もの騎士が辞めていったそうだ。

「ここの本当の番人は、プリムの母親なのだ。今は病で床に伏しているが、彼女たちピーモ族だけが自由に出入りできる。俺の役目は、彼女たちを無慈悲な連中から守ることだ」

ピーモ族とは、小さく尖った耳を外見的特長として持つ、長命の種族だ。およそ人間の二倍以上は生きる。アイソリユースはこのピーモ族で、ピーモ族にとつて彼女は英雄だった。しかしそのために、ピーモ族は迫害を受け、人間とは関わらずに生活をしていることが多い。しかしプリムたち母子は、この蔵書を管理するためにチャンドラーによつて招かれ、ボルンがその保護を任されたということなのだろう。

「アイソリユースが心を許すのはピーモ族だけだが、人間に危害を加えるということはない。無理にとは言わないが、その気があるなら、中を覗いてみるか？」

イーリーはすぐに頷いた。興味もあるが、何より卒業レポートをどこで書くか迷っていたところだったからだ。アイソリユースに何をされるのかわからなかったが、少なくともレンツ・ファラディの陰湿さを上回ることはない気がした。

さつそく部屋に戻つて簡単に荷物をまとめると、イーリーは岩壁をくり抜いて造られた書庫に足を踏み入れたのである。約束により、特別な用事以外の外出は禁止された。食事はお金を渡し、ボルンが用意してくれることになった。無闇に出入りすることで、人の目を集める事になるのを防ぐためだった。これもみな、心無い人からプリムたちを守るためだと教えられた。

書庫には、毎日一冊ずつ読んでも十年以上は掛かると思われるほど、膨大な本が高さ五メートルほどの本棚にびっしりと並べられていた。その本棚が四つ並び、部屋の奥に十メートルほど伸びている。本棚の手前、右手奥には燭台しよくだいの乗る年季の入った木製の机があった。

夜には闇に吞まれて見えなくなるほど高い天井には、等間隔でいびつな四角い窓が並び、木漏れ日のように明かりが差し込む。

イーリーはまず、どんな本があるのかを確認する作業で、最初の一日を費やし、夜を迎えた。そしてプリムが運んでくれた食事を本を読みながら済ませ、寝袋にもぐって眠ったのだ。

こうして昨日からの記憶の輪が結ばれ、イーリーは寝袋から這い出すと椅子に腰掛けて小さく頭を振る。跡が残っていないかと心配しながら目を拭い、ぼんやり部屋の中を眺めた。

嫌な夢を見た。忘れたかった。けれど忘れてはいけない夢。精神的な疲労が、彼を襲う。今何時だろうか……彼がそう頭の隅で考えた時、プリムが朝食を持ってやってきた。

「お兄ちゃん、おはよう」

小さな声で、あいさつをする。こちらの様子を伺うように、不安げな、しかしそれに勝る好奇心の光を宿した眼差しでイーリーを見た。

「おはよう、プリム。今は何時頃かな？」

少女はわずかに頭を傾げ、数回首を振ると「時計がないの」と答えた。

「困る？」

「ううん、大丈夫。それより、一緒にご飯を食べない？ 一人じゃなんだかつまらなくて」

プリムは頷くと、自分の食事を取りに走って出て行った。その後姿を見て、イーリーは笑みをこぼす。ピーモ族は悪魔を崇拜する邪悪の種族で王家を呪っている……などという噂が、今も囁かれたりする。けれどプリムを見る限り、それが本当に根も葉もない噂なのだというのを、イーリーは実感した。

そして同時に、そうした噂の持つ恐ろしさを、改めて感じずにはいられなかったのだ。

噂はまるで伝染病のように広がって、姿の見えぬ幻影で人々の心を支配する。先入観を与え、疑心暗鬼に陥らせるのだった。そして時には、人の命をも奪ってしまう。

あの日の、イーリーの父親のように。

第二章 二話

イーリーの故郷は、一番近くの街まで行くにも歩いて半日かかるほど、深い山奥にあった。道も整備されておらず、馬車などの交通手段もない。しかしのどかで、時間がゆっくり流れるような雰囲気だ。彼はとても好きだったのだ。

だが、土砂崩れの後には偶然発見された魔石の鉱脈によって、村は大きく変わってしまった。強力な魔法補助具として知られている魔石は、採掘される量が少ないことからとても珍重されている。そのため、ひとたび鉱脈を見つけたなら、莫大な富を築くことができるのだ。

村の男たちは皆、それまでの仕事を辞めて採掘作業に明け暮れ、魔石販売の最大手である『ギムナジム・カンパニー』と独占契約を結び、すべてが順風満帆かに思えた。しかしある日突然、採掘作業中に次々と村の男たちが倒れたのである。

激しい頭痛とめまい、中には吐血するものもいた。何か有毒ガスなどが発生しているのではと心配した村は、すぐにギムナジム社に調査を依頼したが、結果は、過労とストレスによる症状で採掘現場に原因はない、というものだった。だが、それにどうしても納得できなかったイーリーの父親は、独自に調査を開始し、魔石に関するある論文を発見したのである。

それは、魔石は破壊された時に多量の魔力を放出し、それを人体が繰り返し浴びると害をもたらす……というものだった。イーリーの父親はこれを証拠に村人を説得しようとしたが、誰も耳を貸さうとはしなかった。実際に体調不良になった者たちも、しばらく休めば治ることからさほど深刻には考えていなかったたのである。

それどころか、イーリーの父親が村から採掘される魔石は粗悪品だと、街に行つて言いふらしているという噂まで流れたのだ。

これに対しギムナジム社は契約の打ち切りを匂わせ、それに慌て

た数人の村人がイーリーの父親を私刑にしたのである。どんなに採掘しても、それを加工して販売するには専門の会社との協力が必要不可欠なのだ。もしギムナジム社と契約を打ち切ったら、おそらくどの会社も見向きもしないだろう。一度目の当たりにした巨額の富を、村人たちは失いたくはなかったのだ。

イーリーが見た最後の父親は、その面影すらないほど腫れた顔と、血にまみれた姿だった。

憂鬱うつうつそうに息を吐いたイーリーは、暗い気分を振り払うように頭を振る。昨晚、久しぶりに父親の夢を見たせいで、蘇る光景はやけに鮮明だったのだ。

忘れることは出来ないが、向き合うにはもう少し時間が必要な思ひ出だった。

イーリーは気持ちを切り替え、暗い影が面に出ないよう努める。プリムたちに心配をかけたくなかった。しばらくして少女が朝食を持って戻って来たときは、いつもの彼に戻っていた。

朝食のひと時は、嫌なことを忘れさせてくれるほど穏やかだった。イーリーが一方的に話すだけだが、プリムが関心を持って聞いているのが分かり、彼も思わず饒舌じょうぜつになる。時々、クスクス笑う少女の笑顔に和んだ。

少女も、少しだけ自分のことを話してくれた。

プリムの母リアナは、ここに訪れてから彼女を生んだのだという。来た時はすでに妊娠しており、父親が誰なのかはリアナしか知らない。リアナは今、おそらく風邪だろうと診断され臥ふせっているが、起き上がれないほどではないらしい。ただ、ボルン以外に対しては未だ人間に不信感を抱いているため、イーリーの前には姿を見せないのだという。

プリムはそのことを気に病んでいる様子だったが、イーリーは少しだけリアナの気持ちが分かる気がした。自分もまだ、故郷の村人

と会うことは出来ないだろう。

こうしてそれぞれお互いのことを何となく話していると、わずかながらプリムが打ち解けてきているようにイーリーは感じた。だからだろうか、食事を終えて帰ろうとする少女は、利発さを覗かせる笑顔を浮かべて彼に言った。

「アイサ様はきっと、一人きりで寂しくしていると思うの。会うことがあつたら、お話の相手をしてあげて」

「えっ？」

驚いたイーリーが何か質問をする前に、プリムは出て行ってしまった。

「アイサ様？ 会うことがあつたら？」

不吉なものを感じ、イーリーは少し震えた。

昼食のサンドイッチを頬張りながら、イーリーはレポートに向かっていた。最初は古代から近世への魔法の変遷について書く予定だったが、少し変更して魔法とピーモ族の関わりを中心にした。プリムに会ったことがきっかけだったが、魔法について深く知るためにはピーモ族との関わりを無視することは出来ないと思ったのである。そもそも魔法は、ピーモ族が最初に使い始めたと言われている。しかし養成所で教える魔法の始まりは、初代国王ゼーマン・ハイデルまでだ。それ以前の歴史には、ほとんど触れることはなかった。なぜなら、二千年以上も昔は闇の眷属に支配された混沌の時代であり、当時を知る文献の類もほとんどなかったためである。

ところが、イーリーはこの書庫に来ていくつか興味深いものを発見した。これまであまり知られることのなかった……少なくとも養成所では教えることのない魔法の起源と歴史について、詳細に書かれた本をいくつか見つけたのである。その一冊が『治癒源法』というものだった。

偶然手にしたその本には、生命が持つ治癒力を高めるための方法

として、祈祷から起こる魔法形態が記されており、その一つに、【魔法陣】というものがあつた。【魔法陣】が魔法という技術の最高峰であり、それを簡略化したものが現在でも使われる魔法なのだという。

「——外部からの総合的な治療効果を、より個体の病状にあつた形で柔軟な対処を行うために生み出されたのが、魔法であり薬学である。それらを総じて魔術と呼び、薬草と魔力による細胞刺激によって治療力を高め……そうか、魔法とは本来、魔力を使った医学の一種だつたんだ。でも、それがどうして今のような元素界との契約になつたんだろう」

イーリーはすぐに別の本を探すため、本棚の間を歩き回つた。初日に、何の本があるのか一応まとめたものがあり、その中からよくわからなかつたものを中心に調べることにした。

「あの辺かな」

梯子を持つて来て、イーリーは棚の上の方にある本を物色する。

「これは……何語だろう？」

二十冊ほど、見たことのない言語で書かれた本が並んでいた。中を見るが、やはりまったく読むことが出来ない。ただ、描かれた図からその本がどうやら【魔法陣】の本だということは察がつく。

「養成所では、【魔法陣】を魔力を持たない昔の人が用いた原始的な方法で、一種の祈祷・まじないの類だと教えられたけど、さっきの本には魔法の最高峰つて書かれてた。これが読めれば、何かわかるかも知れないのに……」

とりあえずイーリーは、この何語かわからない本を下に降ろそうと、何冊か脇に抱えた。と、視界の端で何かが動いたような気がして、そちらの方向を見る。

「ネズミかな？」

常識的にそう思ったイーリーだったが、再び何かが横切り、突然、停止した。その姿はネズミよりも大きい、人の姿をしていたのである。

「こんにちは」

「うわあ！」

驚いたイーリーは梯子から転げ落ち、後に続いた本に潰された。

「大丈夫？」

顔を上げたイーリーの前に、半透明の女性が降り立つ。髪の毛長い、スリットの入ったタイトスカートの、美しい女性だ。

（だ、誰？）

戸惑うイーリーはその時、ふとプリムの言葉を思い出した。

（まさか、アイサ様？ えっ？）

その瞬間、彼女こそが『アイサ様』であり、この書庫の主である魔女アイソリユースなのだと、イーリーは直感した。

第二章 三話

忌まわしき存在として知られる伝説の魔女アイソリユースを目前にしたイーリーは、それとは別の理由によって圧倒され、気持ちが悪れるのを感じた。彼女のまとうタイトな服が浮かび上がらせるラインは、イーリーが同年代の男子と比べて奥手であるという事実を除外しても、鼓動の速さを実感せずにはいられない魅惑的なものだったのだ。加えて、視線の高さにスリットから覗く太腿があり、視線を上げれば豊満な乳房の向こうに少女のように微笑む顔がある。しかしそのどれよりも、イーリーの心に深く印象を残したのは、瞳の美しさだった。漆黒の闇は光に濡れ、虹彩に曇りはない。半透明の幻のような身体のなかで、そこだけが実体のように思えた。

イーリーは、下から見上げることになんだか罪悪感を感じて、慌てて立ち上がる。何か言おうと思うが、言葉が浮かばない。動揺している自分に気付き、彼はともかく散らばっている本を集めることで、落ち着くまでの時間稼ぎをすることにした。

「手伝うわ」

そう言つて、アイソリユースも手伝い始めた。イーリーは、言葉に表せない不思議な思いに捉われる。奇妙な違和感……まるで当然のようにそこに居て、本を片付ける手伝いをしてくれるのは伝説の魔女。闇の象徴であり、決して封印から目覚めさせてはならないといわれる『深淵の眠り姫アイソリユース』なのだ。

しかしどうだろう。少なくともイーリーは、彼女を話に聞くような恐ろしい存在には思えなかった。緊張はするが、それはまた別の理由からだ。逃げ出すことや、誰かに報告することなど、微塵も思いつかばなかった。

「あの……」

静寂に堪えかねたように、イーリーが口を開く。しかし言うべき言葉が見つからず、迷った拳句に手にしていた本を示して尋ねた。

「これは、何語なんですか？」

後から思い出したイーリーは、あまりに間の抜けた台詞に恥ずかしくなった。突然現れた伝説の魔女に、まず言うべき言葉ではない。しかしこの時の彼には、会話の糸口を見つけ出すことで精一杯だったのだ。

アイソリユースはイーリーの手にした本を見ると、不意に霧が晴れるように姿を消した。驚いたイーリーは、上の方から声が聞こえて再び驚く。

見上げると、彼女はまるで足場があるように宙に立って、最上段の本棚から一冊の厚い本を取り出した。

「これを使うといいわ」

投げてよこしたのは辞書だった。アイソリユースはまた消えると、彼の目前に現れた。

「レプトン語よ。私が生きていた頃のピーモ族が使っていた言葉で、今はたぶん使われていないと思う」

「たぶん？」

「私は封印の地から離れられないし、小さな彼女はまったくピーモ族の言葉を話することが出来ないの。母親はきつと話せるだろうけど、意識して使わないようにしているみたいだしね」

その言葉を聞いてイーリーは、ようやくすっきりした気持ちがした。アイソリユースだろうという確信はあったが、それを問いただしたわけではない。しかし今の台詞で、自分の確信が間違っていないことを確認できた。

「あの、アイソリユース……さん？」

恐る恐る口にしてみる。すると、彼女は意外な反応を見せた。はにかみながら、じっとイーリーを見つめたのだ。そしてもしもじしながら、何か誤魔化すように咳払いをする。

「えっと……私のことは、アイサって呼んで欲しいかな」

そういえば、プリムが同じ名前を口にしていたのを思い出す。

「アイサさん、ですか？」

どうやら彼女は、アイソリユースと呼ばれることに抵抗があるようだった。イーリーに彼女の要求を拒む理由もなかったので、すぐに承諾する。

「それで、何？」

「えっ？」

「用があるから呼んだんでしょ？」

一瞬の間があり、イーリーは思い出した。確かに名前を呼んだが、何か用があったわけではない。あれは、確認のためにした行動だ。

「あなたはアイソリユースさんですよ？」という意味で、口にしたにすぎない。言葉足らずが誤解を与えたわけだが、それを正直に答えるのは申し訳ない気がした。

結局彼は、本来の目的に戻ることで、この場を切り抜けることにした。アイソリユースに養成所のレポートを書いていることを説明し、そのための資料がここにはないか尋ねたのだ。

「んー、確か何冊があったと思う。でもほとんどが、その本と同じレプトン語で書かれているはずよ。私が覚えていることなら、少しくらい教えてあげても良いけど……」

アイソリユースは腕組をして、意味ありげにイーリーを見つめた。

「あの、何か条件でも？」

「退屈なの。だから何でもいから、色々聞かせてくれればいいわ」思わず身構えたイーリーだったが、意外に普通の条件で拍子抜けする。まさか封印を解けとは言わないだろうが、もう少し難題を出してくると思ったのだ。

「それぐらいなら……でも、ボクもそんなに話題が豊富なほうじゃないから」

「それなら、養成所のこととか、どんなことを勉強しているのかとか、その辺から聞かせてよ。最近の魔法についてはさっぱりなのよね」

イーリーは頷き、養成所で教わった魔法の知識を説明することにした。養成所の成り立ちを話すと、どうしてもゼーマン・ハイデル

の名を口にしなければならぬ。やはり、自分を封印した相手の名は、あまり聞きたくはないだろうと思ったのだ。

話の間、アイソリユースは「へー」とか「ほー」とか、一つ一つに何らかの反応を示した。

「つまり、『元素魔法』が今の流行ってことなのかしら？」

「流行というか、養成所の三年間で教わるのはそこまでだったことなんだ。そこから先は独自に修行をするんだけど、そうした機会に恵まれるのは成績が優秀だった、一部の人たちだけなんだよ。もちろん、独学で魔法を習得した人だっていると思うけど、さっき話した通り、権威というか肩書きというか、そうしたものが一つの判断基準になるから、一般社会で認められるのは養成所を卒業した魔導士だけになってしまう」

「じゃあ、『詠唱魔法』が使えるのは、魔導……士？」

「魔導師、師範の師だよ。音が同じだから、一般的には導師って呼ぶんだ。応用魔法……アイサさんの言う『詠唱魔法』を習得すると導師として認められるわけなんだ。これってつまり、認めてくれる導師の下で修行をしないと、現実的には無理ということになる。だから、世間では応用魔法の認知度は低いんだよ。滅多に使うところを見ることはないからね」

「それだけ、平和になったということなのね……」

一瞬、アイソリユースは遠い目をした。しかしすぐに、好奇の色を覗かせて再び疑問を投げかけた。

「もしかして、『魔法使い』は死語なのかしら？」

「そんなことないよ。魔導士を名乗るには協会の許可が必要だけど、魔法使いを名乗るのは自由なんだ。つまり、魔導士というのは証明書みたいなものなんだ。仕事を依頼する時とか、その人の実力を知る指針になる。協会にも登録されるから、身元もわかっているし、安心ではあると思うよ。だからと言って、魔法使いがダメというこ

とじゃないんだ。ただ、基準がないから誤解を招くことも多いらしいよ」

魔法という、共通の話題が功を奏したのか、お互いに打ち解けることが出来たようだ。

第二章 四話

イーリーが辞書を片手に、【魔法陣】の本を読み始めてから一週間が過ぎた。最初は魔法の歴史という観点から興味をもった【魔法陣】であつたが、読み進めるうちに術そのものに関心が移つていったのだ。

そしてその間も、アイソリユースとの交流は続いていた。

「【元素魔法】と【詠唱魔法】の違いって何だろう？」

「んー、意識するかどうかの違いかな。例えば『走る』という動作は、別に頭で考えなくても出来るでしょ。だけど、より早く走ろうとするなら、それなりに工夫が必要となる。体を作ったり、フォームを変えたりね。魔法だつて同じなのよ。より強力な力……神々や悪魔の能力を引き出そうと思つたら、それなりの準備が必要になる。特に彼らは、物質的なものを嫌うから、普通のアイテムじゃ相性が悪いのね。言霊は属性を持たないから、光にも闇にも有効なのよ」
ことだま

養成所の授業よりも、彼女の話は理解しやすく、興味を持たせてくれる。イーリーは、彼女と過ごす時間を、とても貴重なものに感じた。だからだろうか、心の中にどうしても晴れない疑念が湧いた。……本当に人々から恐れられた闇の魔女なのだろうか？

彼女がアイソリユースなのは間違いない。だとすれば、疑惑の元は二千年以上も昔にあることになる。そもそも、アイソリユースは何故、ゼーマンに追われていたのだろうか？ イーリーはその辺から調べてみることにした。

養成所の図書室にイーリーは来ていた。アイソリユースの蔵書だけでは、不十分だったからだ。

思ったより人の姿は少なく、イーリーは人目を避けるようにこっそりと移動する。だがすぐに、顔見知りの生徒が声を掛けてきた。

「どこ行つてたんだ？ 昨日まで、レンツが探していたぞ」

「だから隠れていたんだよ」

その生徒はレンツとの関係を知っており、気の毒そうにイーリーを見て頷いた。

「今朝から依頼を済ませるために出かけてる。しばらくは帰ってこないさ」

「この試験が終わるまでは、隠れているつもりだよ」

軽く言葉を交わしてから別れると、気になる数冊ほどを選んで隅の席に腰掛けた。ハイドル建国について書かれた本、ゼーマン・ハイドルの伝記、各地に伝わる伝説をまとめたもの……など、思いつく限りの本を調べたが、やはり肝心な事はわからなかった。仕方なくアイソリユースの書庫に戻ったイーリーは、予備知識のつもりでピーモ族に関する本に目を通したが、そこで重要な手がかりとなる発見をした。

「……ピーモ族にとっての本名は、他人が軽々しく口にしていいものではない。家族や親しい者にのみ許される呼び名だが、重要な場面を除き、普段は通称で呼び合うのが習わしとなっている……」

名前を知ること、その相手に災いをもたらす魔法を掛けることが出来る。魔法が日常に根付いていたピーモ族ならではの、風習なのだろう。

（そういえば……）

ふと、イーリーは思い出す。アイソリユースと彼女の名を呼んだ時、とても照れているような反応をしていたのだ。

「もしかして、アイサさんは――」

イーリーの頭の中で、あるひとつの仮説が浮かんだ。彼は急いで、ノートに考えをまとめてゆく。そして仮説をより強固にするための、資料集めに奔走した。

その夜、熱心に本を読みながら食事をするイーリーの前に、アイ

ソリユースが姿を現した。

「お行儀が悪いわね」

悪戯っぽく笑った彼女は、イーリーと向かい合う位置に腰掛ける。そして彼が読んでいる本の表紙を覗き込んだ。

「神格論？」

「うん。二、三百年ほど前に書かれた、魔導士を志す者にはわりとポピュラーな作品だよ。ちょっと気になることがあってね」

そう言うイーリーは、食べかけのパンを口に詰め込んで水で流し込んだ。

「慌てなくてもいいのに」

「実は、アイサさんに聞いて欲しいことがあるんだ。確認というか、疑問というか」

最初は笑顔だったアイソリユースも、少し真顔になって、イーリーの言葉に耳を傾けた。

イーリーはまず、ピーモ族の名前のことについて調べたことを話した。肯定も否定もしなかったが、アイソリユースはやっぱり本名を呼ばれたとき、少し恥ずかしそうにうつむいたのをイーリーは見逃さない。

さらに続ける。

「アイサさんのことを、闇の魔導師と呼ぶのも不思議だった。だって、アイサさんは『魔導師』という言葉を知らなかったんだから。つまり、この呼び名は後付けされたもので、アイサさんが封印される以前の世界では、そんな呼ばれ方はしなかったんだ。これはゼーマン・ハイデルが有能な魔導士だったと言われていることにも、通じるんだと思う」

イーリーはさきほど読んでいた『神格論』の本を取り出す。

「呼び名が後付けだったとして、どうしてゼーマンの方を格下の魔導士にしたのか。たぶんそれがこの『神格論』の影響なんじゃないかって、さっき思い至ったんだ。この作品の中には、魔の力が強大であるほど神の偉大さが確かさを増す、っていう一節があって、き

つとそれを参考にしたんじゃないかと思う。格上の敵を倒す方が、やっぱりかっこいいからね」

さらにイーリーは、まとめた資料の山から一枚のメモを取り出す。「ゼーマンがこの地で戦った様子を記した本から、いくつか気になる箇所を書き写したんだ。えっと、まずは魔法による戦闘の描写のところだけど、本当にここまで強力な魔法をゼーマン本人が使えたのか、正直疑問かな。どう考えても、魔導士のレベルじゃない。多少の脚色はあるにせよ、いささかオーバー過ぎる気がするんだ。もしも本当にこれほどの魔法が使えたのなら、ゼーマンは騎士としてよりも魔導士として有名になっているはずじゃないのかな。現在残る伝記だと、魔法が使えることの方がオマケっぽい扱いだから、これはたぶん別の人の可能性が高い気がする。ゼーマンには従者がいたらしいから、その従者が魔法を使っていたのかも知れない」

いつの間にか椅子から立ち上がったイーリーは、鼻息荒く、夢中になって話を続けた。さながら気分は、謎解きを行う名探偵だったのだが、没頭するあまりアイソリユースの変化には気付かない。

「じゃあ、この従者は誰なのかというと、実はそれがアイサさんだったんじゃないかって思ったんだ。そう考えると、ゼーマンがアイサさんの本名を知っていてもおかしくはないもの。」

二人は旅をしながら、ここへたどり着いた。そして平和を取り戻すために戦い、英雄に祭り上げられる。でも、この土地はずいぶんと昔から、ピーモ族に対して厳しかったみたいなんだ。ピーモ族を嫌う地元の人々にとつてアイサさんは邪魔だった。だから、闇の魔導師に仕立て上げられたんだ。そう考えるとさ、色々と腑に落ちるというか……ねえ、どうかな？」

イーリーの問いかけに、アイソリユースはうつむいたまま黙っていた。そこでようやく、彼は異変に気付いたのである。

「どうかした？」

「……ねえ、イーリー。そんな昔のことを今更知ったところで、どうにもならないよ」

「そんなこと——」

そんなことはない、そう叫びたかった。どうしてここまで、彼女のことが気になるのかわからない。ただイーリーは、アイソリユースが世間から悪く言われることに苛立ちを覚えたのだ。けれど、悲しげな彼女の眼差しを見た瞬間、どんな言葉も口に出れなくなっていた。

「あなたには、遙か昔のお伽^{とき}噺^{はなし}なのかも知れないけれど、私にとっては昨日の事のように思い出せる記憶の一つなの。気が遠くなるほどの長い時間でさえ、胸の奥に突き刺さったこの痛みは、和らげてくれない。そんな辛さを抱えて、生きること死ぬことも出来ない私の想いが、あなたにはわかる？」

「アイサさん……」

「真実なんて、残酷なだけよ」

わずかに震える声でそう言つと、アイソリユースは薄暗い部屋の奥にスツと姿を消してしまった。

第三章 一話

眠れぬ夜が明け、机に突っ伏していたイーリー・シュレイガーは充血した目を擦りながら顔を上げた。天井から差す光の帯は視界を霞^{かす}ませ、まるでこの場すべてが幻想のようにも思えるほど、清々しく、静かだった。澄んだ空気を胸いっばいに吸い込んだ彼は、深い溜息に心を翳^{かげ}らせる。

夜の闇は恐ろしいが、朝の光は穢^{けが}れを知らぬ幼子のような眼差しに似て、わだかまりを見抜かれるような不安に駆られる。永遠を望むことが許されるなら、きっと今のイーリーは、夜の中にいつまでも留まっていたと考えただろう。

それでも訪れた朝に、外の空気を吸おうと書庫を出たイーリーは、出かけて行く老騎士ボルン・ディラックを見送るプリムを見つけた。「どうかしたの？」

照らす朝日と正反対な暗い表情のプリムに、イーリーはそつと声をかける。少女は少しだけ口元に笑みを浮かべたが、すぐに不安そうな顔になった。

「お母さんの具合が悪いの。それで、お爺ちゃんが薬をもらいに
出掛けたんだ」

「具合が悪いなら、薬だけじゃなくて診察してもらった方がいいんじゃないのかな？」

イーリーが言うと、プリムは哀しそうに首を振った。

「来てくれないよ……」

どうして——そう言い掛けて、イーリーは口をつぐんだ。自分にとっては些細な事だが、多くに人々にとって人間とピーモ族の違いは重要だった。

力なく肩を落として戻って行くプリムを見つめ、イーリーは無力感に襲われる。それは、母親を失った時に感じた想いに似ていた。だが、あの時と違うのは、彼には出来ることがあるということだ。

イーリーはすぐに書庫へ戻ると、【魔法陣】の本を開いた。少しずつだが、訳文をノートに書き写している。これまでのわずかな成果からでも、【魔法陣】の持つ力の一端を知ることが出来た。そのなかで、イーリーは自分の進むべき道に新たな選択肢を加えたのである。

もともと魔導士を目指したのは、薬学を学んで病気で苦しむ人を助けたかったからだ。しかし、個人で出来ることには限界がある。必要としている人のそばに、いつも自分がいるとは限らない。一方で救い、一方では救えないジレンマに悩まされるだろう。

だが、【魔法陣】はその悩みを解消する可能性を秘めている。湯治場のような所を、人工的に作り出せるのだ。たとえばこの公園一帯を巨大な【魔法陣】とし、その中にいるだけで生命の持つ治癒力を高めることが出来れば、苦しむ人たちを救えるかも知れない。完治は無理でも、進行を遅らせたり出来れば、医療との連携で回復も可能だろう。

なぜ【魔法陣】がかつては最高峰と呼ばれ、今は低俗な術になってしまったのか。イーリーは、古代の医療としての延長にあったからこそ【魔法陣】は最高峰だったのではないか、そう考えたのだ。そして今のような魔法の考え方からすれば、自然に任せるという方法を受け入れがたいのだろう。しかし、生命本来の回復能力は、自分たちが思うよりも優秀だと、イーリーは信じている。むしろ、過信はしない。だが、治癒魔法も神々の力を借りると考えれば、差異はわずかなはずだ。

昼食後、急に眠気に襲われた。集中して勉強したことで張り詰めていたものが消え、そこに満腹感が訪れたためだろう。イーリーは本を閉じ、ほんの少しだけ休むつもりで顔を伏せた。瞼は重く、意識は急速に深い闇に落ちる。あらゆる境界線が溶け出して、時間も空間も意味を無くした。

どれほどそうしていたのだろうか。不意に、視界が開けた。

そこは、果てしなく広がる荒野だった。空は厚い雲に覆われ、昼なのか夜なのかもわからないほど薄暗い。空気は冷たく、ねっとり絡みつくような不快な気分させる。遠くでは、雷のような音と獣のような唸り声が聞こえた。近くに人の気配はない。

（これは、夢？）

奇妙なほどリアルだが、反対にそれが作り物めいていた。不思議に感じるイーリーは、目の前に現れたその姿に自分の予想を確信する。

（アイサさん……）

半透明ではないアイソリユースが、微笑みを浮かべて立っていた。（ここは、私が生きていた頃の時代。私の、記憶の中の世界……イーリーには、見て知って欲しいって思ったの）

（どうして？）

イーリーは戸惑った。

（……本当はね、わかっていたの。気にしてない風を装っていても、心の中に残り続けている。きつく言ったのは、ただの八つ当たりよ。私の時間は止まったまま、自分の気持ちに背を向けて、変わることを恐れ続けている。認めたら、否定することさえ出来なくなったら、惨めさだけが残っちゃうじゃない）

アイソリユースは、イーリーの横に並ぶ。そして、そつと手を握った。

（たとえ理由が好奇心だとしても、あなたは私を知ろうとしてくれた。本当の私を、見ようとしてくれた。だからあなたなら、いいのかなって……）

好奇心なんかじゃない——少しはにかむアイソリユースを見て、イーリーは喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

（辛いことなんかはさ、誰かに話すことで楽になったりするじゃない？ 面倒な役割かも知れないけれど、あなたと一緒に思い出を辿ることで、私の止まった時間が動き出すかも知れない。気持ちを整

理する、勇気が持てるかも知れない……)

二人の視線が絡み合う。

(ボクが、力になれるなら)

(……ありがとう)

握る手に、力がこもった。イーリーは視線を外し、何もない荒野をさまよわせる。

(闇の世界、本で読んだのと同じだ)

場を繋ぐように、イーリーは話題を振る。夢を共有していると、心の中まで知られてしまいそうな気がした。

(時々、風の強い日にわずかな光が差すことがあるだけで、ずっとこんな薄暗い毎日だった。世界のあちこちでは闇の眷属たちが暴れ、悲鳴がどこからともなく聞こえる。安心できるところなんてどこにもない。それでも人々は力を合わせ、なんとか生きていたわ)

景色は突然移り変わった。そこは、小さな村。

(その日、私の生まれ故郷が、餓鬼の集団に襲われたの。最初は物が狙われ、次に子供たちが狙われた。男たちは武器を持ち戦い、私も、魔法で応戦した)

戦場の真ん中に、イーリーはアイソリユースの姿を見つけた。髪を束ね、田舎の少女のような姿で呪文を唱えている。

「森の狩人、光弓の乙女ラウナ・ジャ・ウーラよ、我が声に応え力を貸し賜え」

無数の餓鬼——その姿は子供のように小さく、全身が灰色にくすんで、頭髮は薄く乱れ、やせ細った体躯でお腹だけがポツコリと膨らんでいる——が取り囲む中、アイソリユースの姿に弓を携えた乙女の姿が重なった。アイソリユースが弓を構えるような格好をする、その乙女も鏡のように同じ動作をする。

話に聞くことはあったが、イーリーが【詠唱魔法】を目にするのはこれが初めてであった。

(詠唱魔法は、自身の体に神々や悪魔の力を憑依させるようなものなの)

隣のアイソリユースが、そつと耳打ちする。

「イェン・エスキュース
光閃破魔矢！」

過去の時代の彼女がそう叫ぶと、乙女の弓矢が放たれ、光の筋が餓鬼を貫いた。その攻撃は次々に放たれ、餓鬼を撃ち滅ぼしてゆく。戦況は、アイソリユースたちが優位だった。だが、彼女の背後を守っていた男が倒れると、餓鬼は肉を貪ることすら忘れたように、アイソリユースに襲い掛かったのだ。

「危ない！」

誰かが叫んだ。しかし、魔法に集中していたアイソリユースは、一瞬だけ身をかわすのが遅れたのだ。血に汚れた爪が柔肌に食い込む瞬間を思い、皆が絶望するその時、飛び込んで来た男の幅広剣が一閃した。

ゼーマンとアイソリユースの、出会いだった。

第三章 二話

流れるように、光の帯が闇を裂く。翻つては餓鬼を突き、累々たる屍が大地を覆う。アイソリユースたちは勝利し、彼女を救ったゼーマンは村に迎え入れられた。それは、異例のことだ。

「なぜ、助けたの？」

彼女が尋ねると、彼は驚いたように笑った。

「その質問が不思議だな。いや、事情はわかつているつもりだよ。旅を続けて、様々な土地を巡った。人間と君ら種族が互いに争う場面にも、何度か遭遇した。しかし餓鬼を始めとする化け物は、共通の敵と言ってもよいはずだ。ならば味方をする事に、疑問はあるまい」

アイソリユースにとってそれは、新鮮な意見だった。彼女の知る多くの人間なら、ピーモ族を時間稼ぎにして逃げ延びるか防備を固めるだろう。ピーモ族を嫌う彼らが自分たちの村を襲わないのは、そのためだと確信していた。

「俺は小さな漁村で生まれた。近くの森にはピーモ族の、やはり小さな村があつて、互いに物を交換し合う程度の付き合いがあつた。仲良くする間柄ではなかったが、それぞれが必要な存在だという認識はあつたと思う。だからだろう。俺自身はピーモ族にわだかまりはない。両者の違いなど、耳を隠せばわからなくなるほど些細なことだ」

人間であること、そして鍛え上げられた肉体を持つ巨大な体躯であることから、最初は怖がってゼーマンに話しかける者はなかった。しかしゼーマンの真っ直ぐな想いは、次第に村人の心を開かせてゆく。特に子供たちは、ヒーローのように彼を慕った。

「お客さんなんだから、そんなことしなくてもいいのに」

村の中にある小さな畑で働くゼーマンの姿を見つけたアイソリユースは、笑顔で近付きながら言った。彼が村に来てから、半月ほど過ぎていた。

「世話になっているんだ。少しは働かないと、気持ちが悪くなるかな」

「あなたらしい…… たった半月しか知らないのに、そう思える。でもだからこそ、みんなが心を開いたのね」

「そんな大層なことじゃないだろう」

「人間に家族を殺され、憎しみを抱いている者だっているわ。種族の壁は、あなたが思うほど容易いものじゃない。あなた一個人の評価がどうであれ、今も人間を憎む心は失われてはいないのよ。しかしそれでも、格段の進歩といえるはず」

「悪も善も、それを成すのは常に個人だ。集団の価値観は結局、個に帰結する。悪い人間もいれば良い人間もいる。種族や年齢、性別はただの属性に過ぎない」

「怒りや憎しみを抱くには、対象が必要なもの。そうしなければ、自分を保つことが出来ない。割り切るのは、簡単じゃないわ。だから、あなたはすごいものよ。子供たちだって、慕っている」

「君も慕われているだろ？ 子供だけじゃなく、老若男女問わずね。落ちこぼれた君が、村を守るために必死に魔法を勉強したって、村長が懐かしそうに話してくれたよ」

はにかむアイソリユースを見て、ゼーマンは微笑んだ。

「ここは良い村だ。素朴だが、皆の心は鋼のように強くたくましい。餓鬼の生き残りが再びやってくるかとも思い、皆の好意に甘えて長居をしたが、そろそろ行かなければならないようだ」

「どこに、行くつもりなの？」

鼓動が早くなるのを感じながら、アイソリユースはわずかにうわずった声で尋ねる。覚悟はしていたが、いざとなると気持ちが乱れた。

「ここから東にある、人間の街だ。俺の夢の、礎となる街……」

「夢？」

「世界中は今、闇によって覆われているが、希望が失われたわけではない。西の地では飛竜を操る一族が立ち上がり、南の大陸ではピ―モ族の国が生まれたと聞く。わずかずつだが、この世は変貌しようとしているのだ。以前に比べれば闇の眷属の力も衰え、大きな争いも最近ではほとんどない。東に巢食う化け物の群集を一掃できれば、そこに新たな秩序を築くことが可能はずだ。俺は、この地の人々を救い、国を創りたいと思っている」

ゼーマンは真剣な眼差しで、薄暗い空を見つめた。

「こんな世の中だからこそ、それを利用しようと思っている。平和な時には叶わぬであろう夢も、今なら信じられる気がするのだ。おかしいだろうか？ 田舎の漁師の息子が見る夢ではないだろうか？」

「そんなことはない。あなたには、人を惹きつける魅力がある」

目を細め、彼女はそつとうつむいた。不意に、寂しさがこみ上げてきたのだ。

（彼のことが好きなんだとはつきり意識したのは、この時だったわ）
アイソリユースが無感動に呟いた。いや、わざとそう振舞っているのだということが、イーリーにすらわかるほど稚拙な演技だった。そしてそれに気付いた彼は、何故か胸が痛んだのだ。

（……）

（彼の夢はきつと叶うだろうと、私は感じた。けれどそれは、私自身の夢が失われることに繋がると気付いたの）

（どんな夢だったの？）

（平凡な夢よ。非凡な彼とは通じることのない、儂いもの。だから力になるうと思つたの。彼の夢の実現を、自分の夢にしようと思つたのよ。王となった彼の横にいる必要はなかった。ただ、時々いいから逢いに来てくれれば、それだけで私は残りの人生を独りで生きられた）

乾いた笑いが、少し、アイソリユースから漏れた。

（一緒に村を出たのは、それから数日後のこと。私はフードと仮面でピーモ族であることを隠し、彼の従者として旅をした。顔に火傷を負った哀れな男、それが私の素性。誰もが哀れんで、深く立ち入ることがなかったから、正体がばれる心配もない）

（でもそれは、あんまりじゃ……）

（人間の街に行くのだから、仕方がないことなのよ。ピーモ族と一緒に居ることが知れば、街に入ることも出来ないし、そうなれば彼の夢も叶わない。村を出発する前日に、話し合って決めたことだもの）

普段は従者に対する口調で話しかけるゼーマンだったが、時折、人目を避けて野宿をするとき、優しく彼女をいたわった。アイソリユースはそのひと時を心の温もりにし、お互いが必要と思える関係を築きつつあったのだ。けれど、隔てるものなどないと信じた思いは、少しずつ歪みを広げてゆく。

その日、偶然見つけた綺麗な泉で、彼女は汗を流していた。それまでの旅の疲れからか、少しだけウトウトとしてしまったのである。そのため、人の気配を感じるのが遅れてしまったのだ。気付いたときは、腕を掴まれ、泉から引きずりだされていた。

（数人の人間だった。私がピーモ族だと知ると、警戒しながらも私を組み敷いたまま、ニヤニヤと笑いながら見下ろしていたわ）

乱暴を働こうとした男を、彼女は魔法で攻撃した。武器を持っていたが、あしらうのは容易かった。ここまでの実践経験が役に立ったのである。

（彼らが逃げ、姿が見えなくなってから、ようやく彼が現れた。ずっと傍で見ていたのに、助けてもくれなかった。私は不満を漏らしたけど、彼の考えていることはわかっていたわ）

「俺が助けなくとも、あの程度の連中なら大丈夫だと信じていた。それに、今はまだ、ピーモ族と共に居るところを見られたくはない」
タオルを羽織ながら、アイソリユースはゼーマンの背中を見つめ

た。やがて、彼女の心を写すように、イーリーの見る夢の光景は暗転した。

第三章 三話

ゼーマンとアイソリユースが街に着いたとき、路上は戦いで傷ついた人々で溢れ、死者を送る声と悲しみの呻きが聞こえていた。人々は憔悴し、どの顔にも絶望が色濃く浮き上がっている。

「次の戦いで流れを変えなければ、精神的に持たないだろうな」

囁くゼーマンの声に、アイソリユースは同意するように小さく頷いた。誰の目にも明らかなほど、人々は追い詰められていた。しかし裏を返せば、だからこそゼーマンの作戦は成り立つことになる。

街の中心部に歩を進めながら、アイソリユースは彼の背中を見つめた。かつてのような頼もしさは薄れ、疑念と不安が溢れてくる。

自分の存在は何だろうか？ すれ違ったまま交わることのなくなった想いは、一見して平行線をたどるようであって、微妙な角度のまま離れつつあった。修復は、間に合いそうにない。

「少し、待っててくれ」

広場に出ると、ゼーマンはそう言って近くの兵士たちに近付いて行く。広場のあちこちにはいくつものテントが立てられており、疲れきった表情の兵士たちがうなだれ、体を休めていた。何人かが彼女に視線を向けたが、それほど興味を示した様子はない。

やがてゼーマンが戻り、成果を伝える。

「この辺一帯は代々、ハイデル家が治めていたらしい。ずいぶん昔に財産はなくなって力を失ったようだが、当主の信望は厚く、影響力は健在のようだ。彼ら兵士も、ハイデル家のかつての領民が集まって生まれたらしい。当主は少し前までこの街にいたようだが、一人娘が病気で寝込み、戦いも激しくなったため近くの村に避難したんだそうだ。本人はここに残って指揮を取るつもりだったようだが、街の人々が娘のそばにいて欲しいと進言したらしい」

人が人を裏切るのが珍しくもなかった世の中にあって、それほど慕われるということは、ハイデル家の当主とはよほどの人物なのだ

ろうとアイソリユースは感心した。

「今は街の有力者たちが指揮を取っているそうだが、敵の魔法に悩まされているらしい」

「ピーモ族と魔法を結びつけて考えている連中だから、魔法使いがいないのよ」

「そうだ。だからこそ、こちらを売り込むチャンスがある」

アイソリユースは、すぐにゼーマンの考えを悟った。

「無理よ。受け入れない」

「そこまで愚かじゃないさ。現実人間が魔法を使える街を、俺は見てきた。説得する自信はある」

突然現れた男の要求に、彼らは困惑していた。

「戦闘に参加してくれるのはありがたいことだが、今、魔法使いと言ったかな？」

天幕の中に三人の男性がおり、中央のもっとも年配の男が尋ねた。
「俺は剣士だが、この者、我が従者は幼い頃より魔法を学び習得している。魔法に対抗しうる攻撃は同じ魔法だ」

「人間が魔法を使うなど、聞いたことはない。その者は本当に人間か？」

「俺は西の果てにある故郷を出て旅を続け、様々な街を巡った。あの街では、やはり敵の魔法攻撃に悩まされ、多くの人間が魔法を習得し対抗した。時には治療にも用いられ、その用途は多岐に渡る。闇の術と言うが、古の神々に力を借りる呪文もあると聞く。俺の剣は俺の意思によって悪を斬るが、勝手に動いて善人を斬ることはない。魔法も同じだ。使う者の意思によって、善にも悪にも染まるのだ」

「言いたいことはわかった。しかし我らに信じろというなら、まず、その者の姿を見せるべきではないかな？ フードと仮面を取り、人間であることを証明してみせよ」

どうするつもりなのか……アイソリユースがゼーマンを見ると、彼は小さく頷いた。彼女は覚悟を決めて、まず仮面は付けたままフードだけを脱ぐ。結んでいた長い髪と、しなやかな肢体が露わになった。幸い、ピーモ族の耳は髪に隠れているため見えてはいない。彼らは小さな声を上げ、息を呑んだ。すると、突然ゼーマンがその場に膝を付いたのだ。

「彼女は、俺の婚約者だ」

思わず、アイソリユースは声を上げそうになった。

「旅の途中、激しい戦いに巻き込まれて美しかった彼女の顔は炎に焼かれてしまったのだ。彼女はとても悲しみ、死のうとした。しかし俺は彼女を説得し思い留まらせ、仮面とフードで女であることを隠すことを提案した。そうすることで、余計な詮索や同情の眼差しに晒されずにすむと思ったからだ。女にとって、顔に傷を負うことがどれほどの苦しみなのか、察していただきたい」

ゼーマンは深く頭を下げ、土下座をした。そして、

「どうか仮面を取ることだけは勘弁して欲しい。これ以上、俺の愛する女性を苦しめたくはない」

痛む胸に、アイソリユースは溢れそうな涙を堪えるのに必死だった。彼の言葉を素直に信じられない自分に対する嫌悪と、嘘に晒される恥辱が切なかった。言葉を重ねるほど、互いの心は離れてゆく。「どうしても俺たちを信じられないというのなら仕方がないが、俺たちにあなた方を騙す気などない。たが、このままでは勝ち目などないはずだ。街の人々は追い詰められている。判断を誤らないで欲しい」

熱っぽく語るゼーマンに、彼らは心を動かされたようだった。しかしただ一人、アイソリユースの心だけは冷たかった。

それから数日後、闇の軍勢の攻撃が再び開始された。街の前方一キロの所に作られた防衛線に兵士が集結し、倍以上の敵の進行を辛

うじて止めることが出来ていた。しかしそれも時間の問題なのは、明らかだった。すぐに、ゼーマンの提案した作戦が実行に移されることとなる。

アイソリユースの事は一部の人間にのみ説明され、多くの人にとってはゼーマンの従者としてしか知られていない。むろん、女性であることも秘密である。

魔法を恐れる者もいるため、ゼーマンたち二人は別行動を取ることにした。側面から攻め、敵を混乱させることが任務だ。百名ほどの兵士を付ける提案もされたが、ゼーマンが断った。

「二人で十分だ。これまでもそうして来たし、身軽な方が動きやすい」

まず、ゼーマンたちが闇の軍勢の真ん中ほどに突入し、敵を斬り崩してゆく。その様子を確認して、人間の軍が突入するという手筈になっていた。

岩陰に潜んで敵の様子を伺っていると、ゼーマンが声をかけて来た。

「怖いかな？」

アイソリユースは首を振る。

「目に見えるものを恐れはしない」

「では、何を恐れる？」

しかし、彼女は何も答えなかった。すると、ゼーマンは話題を変えた。

「ところで、魔法を学ぶ時には、何か教本のようなものがあつたのだろうか？」

「突然、何？ 本ならあつたけど」

「それは今、どこにある？ 普通に……たとえば入手しようと思えば簡単に手に入るものなのか？」

「ものにもよるわ。より高度な魔法について書かれた本は、希少価値が高いから簡単には手に入らないと思う。中には世界に一冊しか存在しない本もある。私が使った教本は家に残ってるわ。珍しいも

のも、何冊かあったはずだけど。どうして？　今、話すようなことじゃないでしょ？」

「世界が平和になった後のことを考えたんだ。闇を完全に払うことは出来ない。力は均衡してこそ、安定する。いずれ多くの人間が魔法を学び、闇に対抗しうる力をつけるはずだ。そのために、どうすべきなのか、ふとそう思った」

アイソリユースは、平和な世の中を想像し思った。その時、自分はどこにいるのだろうか、と。

第三章 四話

闇の軍勢の数は多いが、大半は知能の低い化け物で仲間意識というものは薄い。ゼーマンが背後から切りつけて身を隠す、という行動を繰り返すと、とたんに仲間割れが始まった。そこへアイソリユースの魔法攻撃が始まり、すぐに人間の軍勢が突入するとあっけなかった。敵のまとめ役がほとんどいなかったのも幸いし、久しぶりの勝利を手にすることができたのだ。

一番の功労者として、ゼーマンは人々の歓声を浴びた。アイソリユースはそれを、群集の中から冷ややかに見つめる。割り切れない思いを隠すように、彼女自身もまた宿舎に消えた。

従者ということでゼーマンと同じ部屋だったが、彼が戻ってくることはなかった。人伝に聞いたところ、ハイデル家の当主が労いの言葉を掛けたいと、食事に招待したのだという。そしてそのまま一泊し、別の、もう少し立派な部屋を用意されたのだった。

ゼーマンはたった一度の戦いで、すっかり英雄のようになってしまった。単身で敵の軍勢を攪乱^{かくらん}し、勝利をもたらした……そう噂され、やがて事実と摩り替わってしまったのである。その後何度か戦いがあったが、人々が魔法を恐れるという理由で、ゼーマンたちが戦う姿はいつも遠くにあったのだ。そのため、アイソリユースの存在は何も知らぬ人々の中から消えつつあった。

そんなある日、何度目かの小競り合いから戻った彼女は、ある噂を耳にした。ハイデル家の一人娘、エリーナとゼーマンの婚約が近々決まる、というものだ。自分が結ばれる可能性がないのはわかっていたが、やはりそうした話を聞くと彼女の心は傷ついた。しかし、噂はそれだけではない。

同じ宿舎の兵士たちが、アイソリユースが実は女なのではと囁き始めたのをきっかけに、ゼーマンの婚約者だという作り話がどこから漏れたのだ。そしてゼーマンはエリーナに恋をし、醜い彼女を

邪魔に思うようになったというのである。

「戦いで多くの人が死んでいるんだ。従者一人いなくなっても、誰も気にしないだろうさ」

誰かが冗談めかして言ったその言葉が、アイソリユースの心にいつまでも残っていた。

（私が再生の魔法を自分にかけたのは、それからすぐのこと。出来れば役にたたずに済むことを願いながら、戦場に出かけていたわ。けれどいよいよ、闇に怯えることなく暮らせる世界が来るという、その最後の戦いで、私は彼に捨てられた……）

燃え上がった炎が静かに衰え、二人の周囲にはもの言わぬ屍ばかりであった。

「あなたは私の屍骸の上に、何を築くというの」

「法を築く。それが、この国の礎となる」

「血塗られた法に、人の心は縛られない」

「光が強く輝けば、闇はそれに打ち消され薄くなる。やがて、時がすべてを忘れさせるだろう」

アイソリユースのすべての思い、そしてささやかな夢と願望を、その身とともにゼーマンは切り裂いた。胸に去来するものが何であったのかは分からないが、最後まで、彼女のために流す涙はなかった。

貫く刃の冷たさが、彼の心のように思えた。

（何もかも、気付いていたんだと思う。私が再生の魔法を掛けていたこともね。だから私を封印したのよ。蘇ることがないように。どんな気持ちだったのかしら？ 自分が疑われていることも知っていて、それでも優しく語り掛ける彼は、どんな気持ちだったのかしら…… それを考えると、とても、恐ろしい）

拒絶するような闇が、イーリーの心を覆った。鼓動に合わせて、アイソリユースの痛みが伝わる。二千年という時間も癒せないほど、

染み付いた匂いのような絶望と憎悪。暗闇の中に小さな炎を見つけた時、イーリーは思わず震えた。

凍えるような、炎だ。

（気が付けば、彼はもういない。どれほど恨んでも、憎んでも、虚しさばかりが心を埋めるわ。それでも忘れることが出来ずに、私はずっと彷徨っていた。けれど、いい加減、私も疲れちゃった。だから、ためらいもあつたけれど、思い切ってこんなことをしてみたつてわけよ）

照れくさそうに彼女は笑った。自分が彼女の助けになれたのなら、イーリーは嬉しいと思う。けれど、どうして自分だったのか。長い時間の中で、チャンスは他にもあつたのではないだろうか。

（イーリーに会えて良かったよ。君が卒業して王都を離れる時、私自身を縛っていた呪いも解ける……）

様々なものが遠ざかり、アイソリユースの姿も消えてゆく。その最後に、柔らかな唇が頬に触れた。友達にしては長く、恋人にしては短い時間の、出来事だった。

やがて、意識がはつきりとして目覚めたイーリーは、自分でも驚くほど鼓動が早いのに気付いた。慌てるように周囲を見渡すと、いつの間にか夜になっており、明かりが灯され、テーブルには冷めてしまった夕食が乗せられていた。心の中でプリムに礼を言ったイーリーは、パンを一口頬張った。

とたん、なんだかほっとした気分に含まれる。すべては夢だ……そう思うことで、イーリーは湧き上がる気持ちに整理をつけたのである。

しかし、それでも不安を拭い去れない事がひとつだけあった。それはアイソリユースの心の片隅にある、小さな小さな、だが、決して消えることのない濃密な、復讐の炎だった。

今はもう使われていない、壊れた水車小屋の中に、レンツ・ファ

ラディは身を潜めていた。赤いカーペットを敷き、一人掛けのソファとテーブルを並べ、優雅に紅茶を飲む姿はとても隠れているようには見えない。

卒業試験の任務のためにレンツは、誰も住んでいないはずの屋敷に出入りする怪しい一団を見張る場所として、田畑の中にあるこの水車小屋を選んだのだった。

「お坊ちやま！」

壁の穴から屋敷を監視していた男が、緊張した声を発した。

本来、任務は自分だけで行うのだが、息子を心配した父親が実家の近衛兵から腕がたち信頼の出来る者を選んで、食事を運ぶという名目で助力を指示していたのである。

「どうした？ 何か動きがあったのか？」

「夕暮れの闇に紛れ、屋敷に人が集まっているようでございます。確認できただけでも、十数名はいるかと」

レンツはカップを置くと、腕を組んで目を閉じた。

「はつきりとした目的はわからないが、人助けとも思えない。よからぬ企みがあるのだろう。思い切って、乗り込んでみるか……」

「危険です！ 人数も定かではないうえに、どのような相手なのかも不明とあつては——」

「ならば、このまま悪事が行われたらどうする！」

「荒事は兵士に任せるべきです。王都の騎士団に連絡をし、援軍を呼びましょう。お坊ちやまは任務を果たしたことになりますし、悪事も防げます」

彼は少し考え、頷いた。

「ならば、お前が援軍を呼んで来い」

「いえ、私が行っては何かと差し障りがございましょう。手紙をしたため、近所の者に届けさせるのが良いかと」

「よし」

こうして書いたレンツの手紙によって、すぐさま百名ほどの騎士団が派遣。夜明けを待って屋敷に突入し、二十名余りの、黒装束の

男女を捕らえることが出来た。しかし数名を逃し、さらに驚くべきものを見つけたのである。それは、城の見取り図に、国王暗殺の密書であった。

第四章 一話

朝の光がいつもより弱々しく、はつきりしない灰色の雲が広がっていた。いつもより冷たい空気を吸い込んで目を覚ましたイーリー・シュレイガーは、プリムが来るまで片付けをしていた。

「おはよう、お兄ちゃん……」

朝食を持ってやって来たプリムは、いつもより元気がない。イーリーはすぐに、彼女の母親の具合が悪いことを思い出した。老騎士ボルン・ディラックが薬をもらいに行くのを見送る姿が、脳裏に再現される。

（来てくれないよ……）

診察に来てもらった方が良いのではと言ったイーリーに、プリムはそう答えたのだ。

「具合は、そんなに悪いの？」

彼が尋ねると、プリムは小さく頷いた。

「タベからすごく苦しそうな。咳も止まらないし……」

少女の不安そうな表情に、イーリーの胸は痛んだ。何かしてやれないだろうか——彼が気遣うように尋ねると、少しだけプリムは微笑んで首を振った。

「今、お爺ちゃんが医者さんの所に行ってるの。お母さんを診てくださって、頼みにいつてくれてるんだ。だから、大丈夫」

「そっか。でも、何かあったら遠慮しないで言ってね」

「うん、ありがと」

戻って行く後姿を見ながら、イーリーは溜息をついた。自分に来ることなど、たかが知れている。薬の調合は可能だが、風邪や腹痛など、一般的な症状にしか対応することが出来ない。薬は、診察をして細かな症状に合わせて調合しなければ、効果的とはいえなかった。しかしイーリーに出来る診察など、素人よりはマシな簡単なものでしかない。

「お医者さんに診てもらうのが、一番なんだよな」

そう独り言を漏らしたイーリーが食事をしようと振り返った時、壁の方を見て仁王立ちのアイソリユースがいた。

「何してるの？」

驚いたイーリーが尋ねると、アイソリユースは険しい表情で答える。

「なんだか、危ない状態ね」

彼女の視線を追うが、そこはただの壁で、特に変わったところはない。

「何かあるの？」

「壁の向こうに、母親が寝ているのよ」

どうやら、魔法を使って壁の向こう側を見ているようだった。残念ながら、イーリーには出来ない。

「見る？」

首を傾げ、アイソリユースがそう聞いた。イーリーは一瞬迷い、頷く。何かしたいという思いが、強く湧き上がった。

手招きをする彼女のそばに行くと、アイソリユースはイーリーの背後に回って、肩を抱くように首に腕を回してくる。柔らかなものが触れる感触はあるが、体温は感じられない。

「壁の一点をじっと見て。意識を目に集中するの」

耳元で囁く声が、催眠術のようにイーリーの心に浸透する。

「最も小さき探求者、物見のシャーウッドよ、我が声に応え力を貸し賜え——透視開眼^{イン・カラ}」

やがて視界の光が強くなり、白くばやけてきたかと思うとすぐに元通りになった。すると、壁が透けて、粗末なベッドに寝た女性の姿が映った。

青白い顔は頬骨が浮かぶほどやつれ、苦しそうな咳をするたびに、胸が大きく上下する。プリムがそばで水を飲ませようとしているが、すぐに吐き出してしまっていた。

枕元に散らばる抜けた毛髪が、痛々しい。

「病名はわからないけど、私は何度か同じような患者を見たことがあるわ。たぶん、間違いないとおもうけど、村のおばあさんがそうだった」

「……」

「あの時は医者に診て貰って、数日もしないうちに元気になったはずよ」

「……」

「こじらせなければ、大した病気じゃないと思うけど、今のままだと危険かも知れないわね」

アイソリユースばかりが話し、イーリーは無言のままだ。おかしく思い、彼女は無反応のイーリーの顔を覗き見た。すると、目を開き、顔面蒼白で固まっていたのだ。

「イーリー？」

「……母さんも死ぬ前、痩せ細って、ひどく咳き込んでいたんだ」
彼の脳裏に蘇る母親の姿が、プリムの母親と重なった。それは偶然同じような症状だったのかも知れないが、イーリーにとっては人事のように思えない気分だったのである。

「何とか出来ないかな……」

「医者が来れば問題なさそうだけど、その可能性は低いと思うわ」
楽観的に考えても、アイソリユースの言う通り可能性は低い。そのことは分かっていたが、心のどこかには希望を捨てきれない思いがあるのも事実だ。

「詠唱魔法に治癒があつたと思ったけど、それじゃ無理かな？」

「怪我とかなら大丈夫だろうけど、内臓の病だと完治は無理ね。でも、症状を抑えたり、進行を止めたりは可能だと思うわ。もしかしてイーリーが？」

振り返ったイーリーは、無言でアイソリユースを見た。

「私は無理よ。多少の魔法なら使えるけど、封印のせいで制約が多いの。治癒系は地味だけど、高位魔法だから今の私には使えないわ」
イーリーは唇を噛み、うなだれた。しかしすぐに顔を上げ、

「誰か、魔法の使える人に頼んでみれば――」

「ダメ。ここにピーモ族がいることは極秘ってわけじゃないけど、出来れば知られたくない事なのよ。噂が広まったりしたら、どうなるか想像できるでしょ？ 今は幸い、私の噂で人が寄りつかないから問題は起きてないけれど……」

「でも、ここはチャンドラー様の管理下なんですよ？ だったら……」

「代わりはいるもの。役にたたない病人は追い出されるか、始末されるだけよ。助かる見込みなんてない」

道端で死んだ母親を、イーリーは思い出す。何も出来ない無力さに打ちのめされる中、命の火が消えるのを待っただけの時間。それは永遠のようで、一瞬のようでもある時間だった。今、プリムがあの苦しみに耐えているのだ。

「……一つだけ」

不意に、アイソリユースが言う。

「方法が一つだけ、ある」

彼女の瞳の中で、小さな炎が妖しく揺れた。

「書庫の一番奥の壁には魔法の仕掛けがあつて、小さな部屋が隠されているの」

イーリーの体が、緊張で強張った。これ以上聞いてはいけない、そんな胸騒ぎを覚える。

「その部屋には一本の幅広剣が突きたてられていて、封印の鍵の役目を果たしているのよ。私は触れることも、近寄ることも出来ないその剣を、もしも、折ることが出来たら……」

「アイサさんは！」

彼女の言葉を遮り、イーリーは慌てたように声を荒げた。しかしすぐに落ち着きを取り戻し、静かに深呼吸をする。自分でもわかるほど、鼓動が早い。

「アイサさんは、プリムのお母さんを助けた後、どうするの？」

「……」

「お城に行くつもり？」

アイソリユースは何も答えなかったが、イーリーにはわかった。深い闇の奥で、消えることのなかった小さな炎が少しずつ勢いを増している。

「ボクには、出来ないよ」

数瞬の間後、アイソリユースは「冗談よ」と微笑んだ。イーリーは、笑えなかった。

絶望するには若すぎて、少女は小さな胸を痛めていた。自分の世界は母のそばにあって、それ以外の場所など想像も出来ない。不安で、押し潰されそうだった。
大好きなお母さん……とても、大切な人。だから、諦められなかった。

（お母さん、待ってて）

少女は決意を胸に、雨の降る夜の闇へ足を踏み入れた。

第四章 二話

夜、イーリーが本を読んでいると、激しく扉が叩かれた。初めての出来事に驚くイーリーの耳に、老騎士ボルン・ディラックの声が飛び込む。

「プリムは来ているか？」

彼が扉を開けると、しとしとと降る雨の中、ボルンが緊迫した顔で立っていた。

「夕食の片付けに来てから、会ってませんけど……」

「そうか……昼間ずっと母親の看病をしておったから、疲れてもう眠ってしまったのだと思っていたのだが、様子を見に行ったらもぬけの殻だった」

「こんな時間に、どこへ？」

そう問いかけてから、ハツとしたようにイーリーはボルンを見た。ボルンもすぐに気付いたようで、後悔が老練の皺深い顔に滲んだ。

「あの子を励まそうと、期待させすぎた」

「ボクが見てきます。ボルンさんはプリムのお母さんを見ててあげてください」

「すまない。頼んだぞ。ピーモ族であることが知れば、何をされるか——」

イーリーは上着を羽織ると、暗闇の中、飛び出してゆく。明かりのない公園の中を抜けるのは、本能に訴えるような圧迫感がある。プリムがここを、心細い不安を抱いて街に向かったのかと思うと、イーリーの足は自然と速まった。

何度も木にぶつかりそうになりながら、ようやく公園を抜けたイーリーは、とにかくプリムの姿を探して走り回った。名前を呼ぼうかとも思ったが、あまり騒ぎにならないようにした方が良さだろうと判断し、視認で細い路地から子供が隠れられそうな場所までを調べたのである。しかしすでに深夜で、小雨が降り肌寒いということ

もあって、人の姿がまったくなかった。

イーリーが落胆し途方に暮れていると、人の怒鳴り声がわずかに聞こえた。すぐに声は聞こえなくなったが、イーリーはその方向へ足を向ける。すると、街の端にある小さな診療所のドアが開き、明かりが漏れていた。そして、体を押されたらしく、よろめきながら小さな人影が転げ出てきたのだ。

「プリム……」

駆け寄ろうとしたイーリーは、だが、すぐに足を止めた。少女は雨で濡れた地面に汚れるのも気にせず、膝を付いて頭を何度も下げた。

「お願いします。お母さんを助けてください」

ドアのところに立つ中年の小太りの男は、腕を組んだまま吐き捨てるように言う。

「帰れ。何度頼まれようと、ピーモ族の診療をするつもりはない。世話になったボルンさんの頼みだから、仕方なく薬は出したがな、それだって本当は迷惑だったんだ」

「お願いします。お母さん、とっても苦しそうで……」

「知ったこっちゃないよ。ピーモ族がどうなるうが、関係ないさ」

「お願いします……お願いします……」

プリムは男の足にすがりつく。すると、男は加減なく少女を蹴り飛ばした。

「汚いから触るんじゃない!」

「プリム!」

たまらず、イーリーは駆け寄ってプリムの体を抱き起こした。そして、

「一時間もあれば、行って診察して帰って来るぐらい、できるでしょ? たったそれだけのことじゃないですか」

睨み付けるイーリーに、男は眉を寄せた。

「何だ小僧は? お前は人間だろ? ボルンさんの知り合いか?」

「ボクは今、ボルンさんやこの子にお世話になっています」

「子供が変なことに首を突っ込むなよ。まったく、ピーモ族は魔法で人を操るらしいからな。気をつけないと後悔することになるぞ」
「ボクがここにいるのは自分の意志だし、彼女たちに関わったことを後悔なんてしません」

「ふん。どっちでもいいさ。さつさとこいつを連れて帰ってくれ」

「彼女のお母さんは、咳が止まらなくてすごく苦しそうなんです。昔ボクの母親も同じような症状で倒れて、亡くなりました。でも医者に診てもらっていれば助かったかも知れないんです。お願いします、プリムのお母さんを助けてあげてください」

イーリーは土下座をすると、額が地面に付くほど頭を下げる。しかし男の心は動かされることはなかった。

「さつさと死んだ方が、いいんだ。いい加減、ボルンさんを解放してやったらどうなんだ？」

「解放……だつて？」

「そうさ、あの人は真面目な人だから、自分の仕事を全うしようとかんばっているんだ。そうじゃなきゃ、誰が好んでピーモ族の面倒など見るものか。お前らに、少しでもあの人に対する感謝の気持ちがあるなら、さつさとくたばって解放してやれ」

イーリーは、怒りで震えた。

「言っていいことと悪いことがあるだろ！」

思わず身を乗り出そうしたイーリーの服を、プリムの手が掴む。

少女の儚げな顔を見た瞬間、イーリーは冷静さを取り戻した。拳を握り、再び頭を下げる。

「お願いします……」

「お願いします」

プリムも一緒に頭を下げた。

「さつさと帰ってくれ。ピーモ族の診察をするくらいなら、野良犬の診察をする方がマシだ」

男は乱暴にドアを閉めると、鍵を掛けて明かりを消した。辺りは静寂と、夜の帳に包まれる。とたん、イーリーはどうしようもない

ほどの無力感に襲われた。

気遣うようにプリムを見ると、少女の体は雨に濡れて、寒さのせいか少し震えていた。イーリーは上着を脱いで彼女に羽織らせると腕を優しく掴んで立たせた。少女は潤んだ瞳で、イーリーを見上げて尋ねる。

「お爺ちゃんは、迷惑なのかな？ 私とお母さんが生きてたら、迷惑なのかな？」

「そんなことない！ ボルンさんが、迷惑だなんて思っているはずないじゃないか。毎日、お母さんの看病をして、薬ももらいに行ったり……さっきだって、プリムがいなくてすごく心配してたんだよ。ボルンさんは、本当にプリムやお母さんのことを大切に思っているし、ピーモ族だからとか、そんなことぜんぜん気にしてないよ。プリムは、ボルンさんが嫌々付き合ってると思う？ プリムにひどいこと、言ったことある？」

少女は強く首を振った。恥じるようにうつむくその目から、涙が溢れてこぼれた。イーリーは優しく少女の肩を抱き、背中を軽く叩く。

プリムはイーリーの服をぎゅっと掴んで、声を潜めて泣いた。

（――胸を張りなさい）

イーリーの脳裏に、母の言葉が浮かぶ。父を恥じた自分に対する、戒めの言葉だった。

あの時、母の気持ちが理解できなかった。父が余計なことをしなければ、こんな惨めな思いをしないですんだのに……ずっとそう思っていたのだ。多くの犠牲が出る前という父の思いは、結局、ほとんどの村人に伝わることはなかった。無駄なことだと思った。けれど今、イーリーはあの時の父の気持ちが少しだけわかった気がした。

結果はわからない。自分の行動が、この街の人々に何をもたらすのか、想像も出来ない。しかし問題を解決出来るかもしれない術を知りながら、それを行わずに見過ごすことはイーリーには出来なか

った。

「プリム、お母さんは絶対に死なせない。必ず、助ける。詳しいことは言えないけど、今はボクを信じてくれないかな？ 帰ろう？」

少女は少し驚いたように、彼を見上げた。澄んだ瞳に映る自分に、イーリーは問いかける。

（ボクは、これから先の人生で胸を張って生きられるか？）

そのために、やるのだ。

はつきりと、力強く頷いた少女の手を取って、イーリーは歩き出す。

雨は、やんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9599x/>

夢の彼方の魔法陣

2011年11月28日01時50分発行